鉄人28号　海鳴に立つ無敵の兵士

敷島重工

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鉄人２８号　海鳴に立つ無敵の兵士

【Ｎコード】
Ｎ９２３７Ｐ

【作者名】
敷島重工

【あらすじ】
太平洋戦争末期。日本軍は秘密裏に、ある計画を進めていた。『鉄人計画』。それはもう一人の正太郎の死によって、永遠に歴史の闇のかなたへと消えていったかに見えた。だが、終戦から六十年たった今、再びソレは動き出そうとしていた…これは自分の意志で悲しみを打ち破ろうとした少女と、過去と戦い、未来を救おうとした少年の物語である。

プロローグ

昭和二十年八月十五日。日本は連合軍に完全降伏、太平洋戦争は日本の敗戦で幕を下ろした。それから５０年。アメリカの占領下だった日本は目覚ましい復興を遂げ、「もはや戦後ではない」を合言葉に、高度経済成長時代を迎え、世界有数の先進国へと上り詰めた。だが、もはや歴史の中の出来事となってしまったこの戦争の「遺物」たちは、今もこの世界のどこかで私たちを睨み続けている事に違いない。そう、黒部ダムに沈み、その役目を終えた「彼」も、その中の一人なのかもしれん。彼は二度葬り去られた。忌まわしい、戦争の記憶と共に。だが…

プロローグ

平成十六年

私、高町なのはは、ごくごく普通の小学三年生です。まだまだ新婚さん気分のパパとママ。とっても優しいお兄ちゃんとお姉ちゃん。私は今日も元気いっぱいです！

「それじゃ、いってきまーす☆」

「いってらっしゃい。」

「いってらっしゃい、なのは。」

「車には気をつけろよ。」

「なのは！お弁当忘れてる！！」

この時私は思いもしませんでした。これから起こる出来事、そして…

『そう、この世に生れてはいけないものがあるんだ。だがしかし、それに気付いた時には、すべては遅すぎたのだ。』

（え…ここは…どこ？）

『ですが、先生。それでは…それでは、彼は報われません！！』

『そう…だがな、たとえそれが息子だったとしても、私には葬らねばならん義務があるのだ。だからすまん。すまない…敷島君…』

『先生…先生えええええええええええええええい！！』

（誰の…声？悲しい…心が締め付けられるような…）

「…のは…なのはっ！！」

「ふにゃあっ！？」

なのはがばっと立ちあがると、教室内がしんと静まり返った。

「高町さん…顔を洗ってきなさい。」

「…ふぇっ！？ご、ごめんなさ～～～～～い！！」

「授業中にいびきかいて寝るなんて、何考えてるのよ、馬鹿！！」

「あう～～～～」

「ね、ねえ、アリサ。そのぐらいにしようよ…」

弁当の時間。なのはは彼女を叩き起こした張本人のアリサに、こっぴどくしばかれていた。

「うるさいわねっ！第一こんな奴が私より理数系の成績がいいなんて、どーゆーこと！？信じられない！！」

ぐうの音も出ないなのは。それはそうである。だが、彼女は夢の中で見た出来事を思いだしていた。

（よく分からないけど…あの風景、去年お父さんと見た戦争の番組に出てきたのとなんか似てた…敷島って人はだれか分からないけど、何故だか分からないけど、とっても悲しくて、寂しい気分になった…）

「…アンタ、人の話聞いてる？」

「…にゃはは☆全・然♪」

カチッ

「うにゃあああああああ！？ギブギブ！！」

「ふふふ…このマットには審判もロープも無いのよ…これこそデスマッチ！！」

後ろからマウントを取ったアリサは、なのはにグリグリ攻撃をしていた。

「ねえ、アリサ。なのはの頭から摩擦で煙が出てるよ…」

「禿げるまでやってやるわ。」

「アリサちゃん、マジでギブ…ぎゃあああああ！！火、火～～～～～～～！？」

頭がファイアーになったなのはは、そこら辺を走り回っていた。

「なのは、消火器！！」

「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」

すずかが消火器をなのはに向けて掛けると、その煙の後には全身真っ白になってぶっ倒れたなのはのなきがらが沈んでいた。

「「なのはあああああああああああ！！」」

「ごめん、なのは。まさか本当に火が出るとは思わなかったから…」

「にゃははは…マジで死にそうだった。」

何故かは知らないけど、保健室で寝ただけで完全回復したなのはは、友人たちと下校していた。無傷とか禿げてねえとか親に普通連絡とか服どうしたとか、そんな事を聞いてはいけない。

「近道通ろうよ。少し道悪いけど…」

アリサがそう言って近道に足を踏み入れる。少し道が悪い…とはいっても、それはお嬢様感覚であり、地面が土の林道だった。しばらく歩くと、なのはの頭の中に、突然声が響いた。

『誰か…この声が聞こえますか…？』

「！？」

足を止めるなのは。すると

『助けて…誰か…助け…』

その声は、途中で途切れてしまった。急いで駆けだすなのは。何故だか分からないけど、この先に何かある。そうなのはは直感した。

「あ、ちょっと、なのはっ！！」

「ちょっと、まってよ、なのは！アリサ！」

二人の友人も後を追いかける。そこで彼女らが見たものは、首に赤い宝石を付けたフェレットを抱えたなのはだった。だが、さらに

衝撃的なものに、彼女たちは目を奪われた。

「誰…？あの子…」

なのはの視線の先には、道を外れた草むらにうつぶせで倒れている、一人の男の子がいた。泥まみれの灰色のシャツに、赤いネクタイ。そして黒い半ズボン。真っ黒の髪の、なのはたちと同い年くらいの男の子だった。

「ひどい…怪我してる！！」

「すぐに救急車を呼ぶね！」

すずかが電話をかけようとしたが

「待って！すぐそこが私の家だから、そこまで運んでいく！アリサちゃん、すずかちゃん、手伝って！！」

「オッケー！」

「うん。そことそこを持って…よいしょ！！」

一時間後。動物病院へフェレットを預けたなのはたちは、ベッドに寝かしている男の子を見た。

「…倒れている子を連れてきたからびっくりしたけど、大きなけ

がはないわ。もうじき目を覚ますと思うわ。」

「「「よかった～～～～」」」

三人はなのはの母の桃子の言葉に、胸をなでおろした。なのははそっと男の子の顔を覗き込んだ。

「ねえ、ママ。この子の持っている鉄の箱…何かな？」

倒れていた黒髪の少年は、気を失っていても、この鉄箱だけは後生大事に持っていたのだ。よくみると両側に取っ手があり、表に三つのダイヤル、上には二本のレバーの様なものがついていた。

「さあ…でも、そっとしておいてあげましょう。きっと、この子にとって大切なものなのかもしれない。」

優しく微笑み、少年の頭をなでる桃子。その表情は、母親の顔そのものだった。

「それにしてもさっきのフェレットといい、そこに寝てる奴といい…なんかしっくりこないわね。こいつ一体何者？」

アリサがぶつくさ言ってたその時だった。

「あっ！男の子が起きた！！」

すずかが声を上げる。男の子の瞼が動く。そしてゆっくり上半身を動かした。

「ん…？こ、ここは…？」

「よかった！気がついた？」

少年が目を開けると、ほぼゼロに近い距離で、栗色の髪の女の子のどアップが飛び込んできた。

「うわっ！うわわわわわ！！」

びっくりした男の子は慌てふためいた。

「えっ！？ここはどこなんです？僕は確か黒部ダムで鉄人を…えっと、き、君は…」

「君は私の家の近くで倒れてたの。私は高町なのは。ここは私の家。」

慌てふためいていた少年だったが、正座をすると、こほんと咳をして言った。

「ご丁寧にありがとうございます。僕は金田正太郎です。ここは一体…それと、黒部ダムは…日本は、どうなったんですか…！！」

これは本来なら相見える事の無かった、二人の出会い。それは１０月の暮れ。おだやかな、秋の夕暮れの出来事でした。

グリコ劇場

鉄人２８号　海鳴に立つ無敵の兵士

原作　横山光輝
　　都築真紀

プロデューサー　三嶋章夫
　　田中渉
　　五郎丸洋介
　　森尻和明

キャラクターデザイン　奥田泰弘
　　なかむらたけし

美術監督　東潤一
　　片岡真司

音楽　千住明
　　佐野広明

主題歌　『鉄人２８号』　唄・海鳴男声合唱団

製作　敷島重工
　　なのはＰＲＯＪＥＣＴ

監督　今川泰宏
　　新房明之

第一回　蘇る正太郎

少女は知らない。これから起こる悲劇を。そう、忌まわしい戦争の記憶と共に蘇るそれを。だがそれは、全ての序章に過ぎない。まだ、何も始まってはいない…

第一回　蘇る正太郎

その日、あるロストロギア…過去の失われた文明の作り上げたオーバーテクノロジーの中の一つが、とある次元世界でばらまかれた。それらは偶然にも、この地球の、日本に降り注いだ。全部で二十一個のそれは、人呼んで『ジュエルシード』と呼ばれた。このエネルギー結晶体は、願いをかなえる力があると言われている。だが、それは歪まれた形でかなえてしまう、欠陥品だった。そしてその内の二十個が神奈川県の海鳴市に、そして何かのはずみで一つだけ飛んでいってしまったそれは、富山県中新川郡立山町に位置する黒部ダムに、静かに沈んでいった。

黒部ダムに沈んだジュエルシード。それは、一つの『鉄の塊』の上に落ちた。すると、わずかに青白い光を出したそれは、静かに鉄の塊へと吸い込まれていった。そして…

ギュインッ！！

一瞬だけ、湖の底で何かが赤く光る。それは、まるで人間の目の様な形の、不気味なモノだった…

「しっかし、これは大変な事になったな…」

ぽりぽりと頭をかく、高町士郎。彼はなのはの父親だ。

「はい、僕にも何が何だか分かりません。何で、何で僕がこんな目に…」

正太郎が混乱をするのも無理もない。そう、今の時代は平成。西暦２００４年だ。一方、正太郎のいた時代は昭和三十一年の１９５６年…つまり、彼は約五十年後の時代にタイムスリップしてしまったのだ。

「でも、周りに大人がいないんじゃ、どうするにも…」

「どうしよう、母さん。この子、ほっとけないよ。」

恭也と美由希も言う。すると桃子が突然立ち上がった。

「大丈夫よ…私にいい案があるわ…」

「マ…ママ…？」

なのはが恐る恐る桃子の顔を見た。次の桃子の言葉に、全員ずっこける事になる。

「正太郎君を、養子にすればいいのよ？」

「「「「「……」」」」」

正太郎は直感した。桃子は、高見沢と同じ系統の人間だと。彼女の様にたかりはしてこないが、もっと恐ろしい事が正太郎の身に迫っていた。

「さ、そうときまれば早速、正太郎君のお洋服を探さなきゃね〜〜〜」

頭を抱えてうずくまる士郎。呆然とした顔で母を見る恭也。正太郎を心配するなのはに、「子供は見ちゃダメだよ」といって部屋に送る美由希。正太郎は、完全に見捨てられた。

「えっ！？ちょっと、それ女の子の服ですよね！？」

桃子の手には、何処で用意したのか知らないメイド服やらゴスロリやら果てはネコミミやスク水まで…そして目を光らせて手をワキワキさせる桃子が。

「じょ、冗談…ですよね…？桃子さ…」

夜の街に、少年の悲鳴がただ永遠と鳴り響いていた…

「ご、ごめんね、正太郎君。」

頭にたんこぶを作った桃子が、正太郎に土下座した。止めたのは士郎だった。

「ダメです…僕は、もう…」

時すでに遅く、メイド服を着させられた正太郎は、部屋の隅に震えて泣いていた。それを見て女性陣が「やばっ！カワユス」となったのはここだけの話だ。

「と、とりあえず…」

結局正太郎は、恭也のお古のパジャマを着る事になった。ところどころ破けているが、本人は全く気にしていない。着ていた彼の服は、明日でもクリーニングに出すことになった。

「た、助かりましたよ、恭也さん、士郎さん。あのまま続いていたら僕は…」

「ははは…実は俺も同じ目に遭ったのさ。小さい時にね。」

物置を整理して作った部屋に、恭也と布団を敷く正太郎。どうやら恭也も受難していたようだ。

「そうだったんですか。…大変ですね。」

「ああ。一度スイッチの入った母さんは、もう手がつけられない。また暴走した時には、俺と父さんで止める。」

「あ、ありがとうございます…おやすみなさい。」

部屋の電気が消えると、正太郎は考え込んだ。一体自分の身に何が起こったのか。自分は夢でも見ているのではないか。とりとめもないことが頭に浮かんでは消えていく。とりあえず、今日は寝ようと思って正太郎は布団の中にもぐった。

その頃なのはは、今日道で拾ったフェレットと、その近くに居た正太郎の事を考えていた。

（あのフェレットさん、寂しくないかな…そして、正太郎君。お父さんもお母さんも生まれた時からいないし、顔も知らないって…可哀そう…）

なのはは小さい頃、父・士郎が重傷を負い、その看護に追われて家でたった一人でいることがあった。期間は三カ月ちょっとだが、それは今でもなのはの心にトラウマとして残っている。誰もいない孤独感。分かってはいても、なのはは寂しかった。でも、正太郎は生まれた時からひとりぼっちなのだ。彼には親代わりの大人が二人いるが、血の繋がった家族はいない。なのはの耐えられなかった孤独を、彼は生れてからずっと味わっているのだ。

「私…正太郎君と、友達になれるかな…？」

なのはが呟いたその時だった。

『聞こえますか…僕の声が聞こえますか…！！』

突然頭に金きり音が鳴る。頭を押さえるなのは。

「昨夜の声と昼間の声と同じ声！？」

するとさらに声が聞こえた。

『聞いてください。僕の声が聞こえるあなた。お願いです。僕に少しだけ、力を貸してください！！』

「あの子が…しゃべってるの…？」

何故かなのはの頭には昼間拾ったフェレットが浮かび上がった。何故だか分からないが、不安がなのはの胸を駆ける。

『お願い…僕のところへ！時間が、危険が、もう…』

そこで声は途切れた。ベッドに倒れ込むなのは。そして考えるより先に、なのはは家を飛び出していた。

「ん…？誰だろう、こんな真夜中に…」

正太郎はバタバタという足音を聞くと、不審に思ってドアを開けた。すると、なのはの部屋のドアが開きっぱなしになっていた。

「なのはちゃんがいない…きっと、話していたフェレットが心配になったんだ！！」

窓から見ると、なのはが走って行くのが見えた。正太郎はまだ泥

だらけの服に着替えると、窓を開けて外へ飛び下り、なのはの後を追いかけていった。

なのはが動物病院で見た光景は、想像を絶するものだった。１０メートルはある巨大な怪物に、夕方に拾ったフェレットが追いかけまわされていた。フェレットが怪物の一瞬のすきをついてなのはのもとに飛んでくる。なのははフェレットを抱き抱えた。木をなぎ倒した怪物は、気とコンクリートのがれきに挟まれ、動けなくなっていた。

「な、何々！？一体何！！」

「来て…くれたの！！」

「えっ！？しゃ、しゃべった！？」

突然人間の言葉をしゃべったフェレットに、びっくりするなのは。だが、怪物は起き上がるとなのはを睨みつけた。

「と、とりあえず逃げなきゃ！！」

夜道に走り出すなのは。逃げながらなのははフェレットに聞いた。

「その、何が何だか分からないんだけど、一体何なの？何が起きてるの？」

するとフェレットは言った。

「君には資質がある。だからお願い！僕に、少しだけ力を貸して！！」

「資質！？」

しばらく時間をおくと、フェレットは言った。

「僕はある探し物をするために、ここではない世界から来ました。でも、僕一人の力では思いを遂げられないかもしれない。だから、迷惑だとは思うんですが、資質を持った人に協力してほしくて…」

するとフェレットは、なのはの目の前に跳び下りた。

「お礼はします。必ずします！僕の持っている力を、貴方に使ってほしいんです。僕の力を…魔法の力を！！」

「魔…法？」

すると轟音を立てて、怪物がなのはの目の前に躍り出た！！

「きゃあっ！！」

尻もちをついてしまうなのは。不気味な怪物は、なのはに狙いを定める。怪物がなのはに襲いかかろうとしたその時！！

ガギューン！！ガギューン！！

二発の銃声。なのはが振り向くと、そこに居たのは拳銃を構えた正太郎の姿だった。

「なのはちゃん！ここは僕に任せて逃げて！！」

「しょ、正太郎君！？嘘！！それピストルだよ！！」

パニックになるなのはを正太郎は叱責した。

「なのはちゃん、話しは後で。とにかく怪物は僕が気を引く。その隙に君は安全な場所まで逃げるんだ。」

「う、うん！！」

一目散に逃げ出すなのは。正太郎は近くにあったコンクリートのがれきを手に持つと、怪物に投げつけた。

「こっちだ、バケモノ！」

「グオオオオオオオオ！！」

怒ったのか、怪物は正太郎を狙い始める。正太郎はしばらく走ると、工事現場に停めてあったショベルカーのドアを開くと、運よく鍵が刺しっぱなしになっていたそれにエンジンを掛けた。

「いくぞ、怪物め。うおおおおおおおおおおおおお！！」

正面から来る怪物。正太郎は全速でショベルカーごと突っ込んだ。

走っているなのは。すると後ろで何かが爆発した。火の手が上がっている。正太郎の行った方だった。

「正太郎君！？」

「あの子…まずい！お礼は必ずします。だから…」

なのははフェレットに言った。

「お礼なんていいよ！私は何をすればいいの？このままじゃ、正太郎君が…！！」

するとフェレットは赤い宝石を差し出した。

「これを！」

その宝石をなのはが手に取る。なのはの手に収まったそれは、さらに赤い光を発した。

「温かい…」

「目を閉じて、心を澄ませて。僕の言う事を繰り返して。」

宝石を握りしめ、目を閉じるなのは。

「いい？行くよ！」

「うん…！！」

フェレットとなのはは目を閉じる。その姿は祈りのようにも見えた。

「我、使命を受けし者なり。」

「我、使命を受けし者なり…」

なのはがそう言うと、宝石の光がさらに強まる。

「契約の下、その力を解き放て！」

「えっと…契約の下、その力を解き放て！」

バラバラになって燃えているショベルカー。怪物がゆっくりと炎の中から起き上がる。正太郎はふらつきながら、廃材置き場から立ちあがった。ショベルカーで特攻した時に、ぶつかるギリギリで脱出していたのだ。だが、爆発に巻き込まれて、頭に破片が刺さり、血を流していた。

「く…くそ…まだ動けるのか、あいつ…」

すると移動を始めた化け物。その先を見ると

「馬鹿っ！なのはちゃん、逃げたんじゃなかったのか！？しかも何をやっているんだ！！」

第三者から見れば、正太郎が命がけで敵を引き離したのに、なのはが道のど真ん中に座り込んでぼーっとしているようにしか見えない。怪物はなのはを見つけると襲いかかろうとする。

「何を考えてるんだよ、全く！このっ！こっちを向けよ、怪物め！！」

その辺に散らばった粗大ゴミを投げつける正太郎。拳銃の弾はもう最初の二発で切れてしまった。だが怪物の動きが止まっただけだった。

「風は空に、星は天に。」

「風は空に、星は天に。」

手に持った宝石の輝きがさらに激しくなる。その光を浴びると、怪物が嫌がるそぶりを見せる。それは正太郎も目視できるほどの明るさだった。

「な、何が起きているんだ、一体…」

正太郎の言葉に答える者はいない。そしてなのはは続けた。

「そして、不屈の心は…」

「そして、不屈の心は…」

その時、閉じていた二人の目が同時に開いた。

「「この胸に！！」」

なのはが立ちあがる。そして赤い宝石を夜空に掲げた。

「「この手に魔法を！レイジングハート、セット・アップ！！」」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ！』

突然なのはの体を桃色の光が包み込み、それが一本の光の柱となって空へと伸びていく。ひるむ怪物。唖然とする正太郎。

「え…何これ！？」

「なんて魔力なんだ…」

二人とも違った意味で呆然となるが、フェレットははっと気がつくと言った。

「落ちついてイメージして。君の魔法を制御する、魔法の杖の姿を。そして君の身を守る、強い衣服の姿を！！」

「そんな、急に言われても…えっと、ええっと…」

断片的に、イメージがなのはの頭をよぎる。

「とりあえず、これで！！」

虹のような光がなのはの体を包み込む。彼女がレイジングハートにキスすると、上から順々に衣服が光と共に弾けて消えていく。するとレイジングハートに小さなかけらが集まり、魔法の杖を形どる。蝶の様な光に包まれながらなのはがレイジングハートを握るのと同時に、光の糸が収束して彼女を戦う時の姿へ変身させる。

鳥の羽根の様な光を舞い散らせながら天空から降りてくるその姿は、まるで天使そのものだった。

「…成功だ…！！」

「えっ！？うそ！！」

だが、当の本人は何が何だか分かっていない。すると今まで怯んでいた怪物が、いきなり襲いかかってきた！！

「なのはちゃん、逃げろ！！」

正太郎は走るも、追いつけない。怪物がなのはに体当たりしたその時だった。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．』

まるでドーム状のシールドの様な光がなのはを守る。すると怪物はバラバラになって吹っ飛んでしまった。

「なっ！？自動車の爆発にも耐える怪物を一撃で！！そ、それより…なのはちゃん！！」

正太郎がなのはに駆け寄る。するとなのはは正太郎を見るなりオドオドしてしまった。

「しょ、正太郎君！！酷いけが…大丈夫！！」

「何ですぐに逃げなかったんだ、この馬鹿っ！！」

なのはの頭に拳骨をくらわす正太郎。だが、その顔は優しい顔だった。

「よかった…無事で…」

「あの後、正太郎君のいた方から爆発が起きて、心配になって、その…ごめんなさい…」

しゅんとなるなのは。すると正太郎はなのはの頭をなでながら言った。

「心配させちゃったんだね。こちらこそごめんね…でも、心配しないで。これでも体は丈夫…うっ！！」

胸を張ろうとした正太郎だったが、とたんにふらついてしまう。額がぱっくりと割れて、顔中血だらけになっていた。

「さて、何となく理解はできた。あの怪物を倒すのは、なのはちゃんの光でしかできない。そうでしょ？イタチ君。」

「う、うん…って、あまり驚いてないみたいだね。」

フェレットがしゃべった事に一瞬だけ目を丸くする正太郎だったが、

「大丈夫だよ。動物がしゃべることぐらい、かわいいものさ。」

「そ、そうなのかい！？えっと、と、とりあえず、ここから逃げるよ！！」

怪物がバラバラになっている間に、二人と一匹は逃げ出した。

「僕らの魔法は、発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そして、その方式を発動させるために必要なのは、術者の精神エネルギーです。これを僕たちは総称して、魔力と呼びます。」

正太郎は振り返ると、信じられない光景を目の当たりにした。

「なのはちゃん、急いで！怪物が自分の体を修復している！！」

なんとバラバラになった怪物の体から触手が伸び、千切れた体を自分にくっつけていたのだ。そしてその時、誰も気がつかなかった。正太郎が肩から提げていたバックの中身が、一瞬だけ青白く光った事を…

「わかった！フェレットさん、続けて！」

「あ、うん！…そしてあれは、忌まわしい力のもとに生み出されてしまった思念体。あれを停止させるのは、その杖で封印して、もとの姿に戻さないといけないんです。」

「よく分かんないけど…どうすれば？」

なのはにフェレットはこう答えた。

「さっきみたいに、攻撃や防御の様な基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力を必要とする魔法には、呪文が必要なんです。」

「呪文…？」

聞き返すなのは。

「心を澄ませて。心の中に心の中に、貴方の呪文が浮かぶはずです。」

フェレットにそう言われ、目を閉じて心を澄ますなのは。その時だった。

「来た！！伏せろ！！」

正太郎がなのはにダイブする形でかばう。怪物もそう都合よくは待ってくれない。倒れている二人に向かって、今度は触手で叩きつけてきた。

「きゃっ！！」

なのはの魔法で何とか防ぐが、連続攻撃の前に、徐々にシールドにヒビが入って行く。

「嘘っ！？いやっ、来ないで！！」

逃げるにしてもシールドを解除したらすぐに触手の餌食となってしまう。そんな事をしている間にも、ヒビは増えていく。その時、正太郎はある事を考えていた。

（ほんのさっき…いや、ここでは五十年も経っているのか…なぜ死んでいった君の事を僕は思いだすんだ…）

正太郎は想った。死んでいった…いや、自らの手で殺した、同じ父と名を持つ兄弟の事を。

（君は…僕の盾であり続けた。だけど、僕は君を守ってあげれなかった…でも…でも…）

正太郎の目から涙があふれる。それを見てなのはが驚く。

「しょ、正太郎君！！」

「伝わらない。届かない。そんなことは分かっているんだ。でも、でも…」

その時、なのはのシールドが木っ端微塵に砕ける。怪物の触手が襲いかかったその時！！

「だから、来てくれ！！鉄人いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいん！！！」

なのはは理解できなかった。耳を貫くような轟音と共に空から降ってきたそれを。蒸気を噴きあげながらゆっくりと立ち上がるそれは、まるで巨人だった。泥や水草が正面を覆っているが、ところどころに錆びついた金属が見えている。その片眼には、真っ赤な光がともっていた。

「何…これ…」

呆然となるなのは。すると正太郎は声をしぼりだすように発した。

「鉄人…鉄人２８号！！」

「ガオォォォ

第二回　その名は２８号（前書き）

はじめての戦闘パートですが、一瞬で終わります。

第二回　その名は２８号

かつて、鉄人２８号と呼ばれるロボット兵器が存在した。第二次世界大戦…いや、太平洋戦争末期。日本軍が一発逆転の起死回生を懸けて立ちあげた計画…鉄人計画。その完成した最終号機が彼、鉄人２８号である。この世には生まれてはいけないものがある。開発者の金田博士の言葉は、意外な形で正太郎に示されることとなる。鉄人の動力…太陽爆弾。これは新元素・バギュームを搭載することで完成し、もし爆発すれば地球上の全生命が以後六十年間生息不能となる環境を作り出すことが可能という最終兵器であった。だが、黒部ダムで暴走した数百機のブラックオックスを倒すために、正太郎は鉄人にバギュームを搭載する事を決意。無双の強力でオックス軍団を粉砕する鉄人。だが、いずれは爆発してしまう鉄人を、正太郎は自ら溶鉱炉に葬らなければならなかった。そして、正太郎は自らの兄弟を殺した。だが…

第二回　その名は２８号

突如として正太郎となのはの前に現れた謎の巨人。正太郎の発した言葉『鉄人２８号』。その声を聞いた時、なのはは驚いた。

「て、鉄人２８号！？歴史の教科書に載ってる、日本を守ったロボット！！」

すると正太郎は言った。

「そうかい…はは、そうだね。そうさ。鉄人は…鉄人は、日本を

確かに守ったさ。でもね、それは鉄人が人柱となったんだよ、なのはちゃん。君には分からないだろうが…大人は何時だってそうさ。教科書には載っているかい？これは、日本軍の作り上げた兵器だということ。鉄人には、核を超える新兵器が内蔵されていたということ。そして…鉄人は、日本政府によって破壊された事。」

「え…？」

正太郎は手を大きく広げながら鉄人の前に立った。

「君、危険だ！！その機械はジュエルシードに吸収されているんだ！！」

フェレットが叫ぶが、正太郎は無視した。

「さあ、僕を殺してくれ、鉄人。そのために、君はここに来たんだろう？分かっていたんだ。僕は償わなければならない。犯した過ちは、あまりにも大きすぎた。そう、そして気付いた。僕という人間がいかに愚かだったということも…だから、さあ、鉄人！僕を殺せ！君には、僕を殺す権利がある！！」

「正太郎君「なのはちゃんは黙っていて。ねえ…鉄人。君は怒っているんだろう…？そうだよね。僕は君を裏切った。都合の良い時だけ僕は君を褒め称え…悪い時には、君を化け物だ、兵器だと罵った。それだけじゃない。自分の犯した過ちを、心のどこかで君のせいにしていた。そうすることで、僕は自分を保身していたんだ。」

正太郎は、もう一人の正太郎に微笑んだ。

「だから…鉄…え……？」

正太郎の顔が固まる。そう、ジュエルシードに取り込まれたのにもかかわらず、鉄人は正太郎を襲おうとはしなかったのだ。正太郎はそんな事を知る由もないが、暴走しているはずの鉄人が何故自分を襲わないのか、信じられなかった。そして突然降りだす雨。雨水の落ちるその目は、まるで泣いているようだった。

「鉄人…君は、許してくれるのか…？君を…君を裏切って殺した僕を！！」

すると鉄人は踵を返して後ろを振り返った。最初に襲いかかった暴走体が触手を広げて威嚇している。

「グオオオオオオオオオオ！！」

鉄人をすり抜け、正太郎に襲いかかろうとしたその時だった！！

「グワァオオオオオオオオオオン！！」

暴走体が真横にすっ飛び、塀をぶち抜く。その拳を放ったのは、鉄人２８号だった。

「ガオォォォォォォォォ！！」

まるで正太郎を守るかのような動きをする鉄人。正太郎は暴走体に向かっていく鉄人の体を見て絶句した。

「嘘だ…壊れた個所が直っていく…まるで生き物みたいに…」

鉄人が二の腕から先の無い左腕を上に掲げると、腕の骨格がゆっ

くりと延びていき、それを機械の配線が覆っていく。そして装甲が徐々に骨格を覆い隠すかのようにでき上がっていく。ものの数秒で、鉄人は失った左腕を修復してみせた。それだけではない。各部が穴だらけな装甲が、少しずつだがその穴が塞がっている。ジュエルシードを取り込んだ鉄人は、唯一残っていた左目から、骨格、装甲、さらには動力機関まで復元していたのだ。だが、これには一つ問題があった。それは…

「おかしい…ジュエルシードが取り込むものは、あくまでも生物…意志のあるものだ。本来なら機械に取りつくなんてありえない。それとも…あの機械には、『意志』があるのか…？！」

フェレットの言葉に答える者はだれ一人いない。すると

「グアアアアアアアア！！」

起き上がった暴走体は、なのはのシールドを破るほどの威力の触手を振りおろす。だが！

ギィン！ギィン！！

正太郎が鉄人と呼んだ巨人は、微動だにせず片腕で防ぐ。

「ギャオオッ！！」

右腕を大きく振るうと、凄まじい勢いでチョップを放つ！！一撃で暴走体は真っ二つになり、その破片が辺りに飛び散る。チョップの衝撃はすさまじく、コンクリートの地面は大きくえぐれ、衝撃波で近くのガラスは粉々に砕けてしまった。

「きゃあっ！！」

「うわっ！！」

鉄人から十メートル以上離れていた正太郎となのはだったが、五メートルも後方に吹き飛ばされてしまった。そこまで鉄人の威力は凄まじかった。千切れた暴走体の胴体が、なのはの目の前に落ちてきた。

「！？今がチャンスだ！封印を！！」

なのはは頭に思い描いた呪文を唱えた。

「リリカル・マジカル！」

「封印すべきは忌まわしい器、ジュエルシード！！」

「ジュエルシード、封印！！」

『Ｓｅａｌｉｎｇ Ｍｏｄｅ． Ｓｅｔ ｕｐ．』

レイジングハートの柄から四枚の光の翼が現れ、光の帯が怪物の体を拘束する。

「グオオオオオオオ！！？」

もがく怪物。だが、鉄人に瀕死にされてしまった体では、どうしようもできなかった。

『Ｓｔａｎｄ ｂｙ ｒｅａｄｙ．』

「リリカル・マジカル、ジュエルシード・シリアルＸＸＩ、封印！！」

『Ｓｅａｌｉｎｇ』

レイジングハートの声と共に、光が怪物の体を打ち抜く。光に包まれて消滅する怪物。その後には、小さな青い宝石が転がっているだけだった。

「あれは…？」

「ジュエルシードです。レイジングハートで触れて。」

フェレットに言われるがままに、レイジングハートの赤い本体で触れるなのは。するとジュエルシードは浮かび上がり、レイジングハートの中に吸い込まれていった。

『Ｒｅｃｅｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　ＸＸＩ』

封印が完了すると、後に残ったのは瓦礫の山だった。だが、ジュエルシードの暴走体はもう一つあった。それは

ズシン…ズシン…

その巨人は、真直ぐなのはと正太郎のもとへと歩いてくる。その途中で、光を失った右目が、まるで目を開くかのように再生する。二人の目の前に仁王立ちするそれは、完全な姿を取り戻した鉄人２８号だった。

「グオオオオオオオ…」

二人を睨みつける鉄人。だが、正太郎は優しく言った。

「鉄人…君は、困っているんだね。自分とは、いったい何者なのか。どうして蘇ってしまったのか。本当は、君自身も分からないんじゃなかったのかな。」

正太郎はつづけてこう言った。

「君が初めて蘇った時…君は、生まれた事を祝福されなかった。親たちは皆、君は生まれちゃいけない、死ななければ、葬らなければならないと口をそろえた。でも、今は違う。今度は、僕が君の盾になる。世界中のだれからも、君を守って見せる。だからもう…終わりにしよう。鉄人。」

バッグから出した操縦機。それに両手で触れる。すると鉄人は、ガタガタとその場で震えだした。

「あ、あれは…？」

「イタチ君。これは鉄人２８号の操縦機だよ。なのはちゃん！今のうちにジュエルシードの封印を！！」

「う、うん！リリカル・マジカル、ジュエルシード・シリアルＩ、封印！！」

『Ｓｅａｌｉｎｇ』

さっきの暴走体と同じように、鉄人も光の帯に貫かれる。すると

左目からジュエルシードが浮かび上がった。

『Ｒｅｃｅｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　Ｉ．』

ほとんど抵抗するそぶりも無く停止した鉄人。ジュエルシードを取り込んだとしても、操縦機の命令を受ける回路は生きていた。だからジュエルシードは活動していても、本体の電源を切ることで動きを止める事が出来たのだ。機能停止した鉄人の目の光は、ゆっくりと消えていった。

「終わった…の…？」

「うん…全部…」

その時だった。

「！？パトカーのサイレン！？すぐ近くだよ、これ！！」

「た、大変だ！！」

なのははバリアジャケットを解除すると逃げようとするが

「待て！そこに居るのは何者じゃ！」

懐中電灯が二人に照らされる。すると小太りの警官とスーツにメガネをかけた男がこっちに走ってきた。

「凄い音がしたと思ってきたら…ややっ！君は！？」

その警官の顔を見た時、正太郎は思わず声をあげてしまった。

「しょ…署長さん！？それに敷島博士！！」

正太郎の目の前に居たのは、彼の親代わりのふたり、大塚署長と敷島博士だった。

第三回　家族（前書き）

今回は、戦闘はありません。

第三回　家族

正太郎となのはが家にこっそり戻ると、ドアの前には般若の桃子が立っていた。お笑い芸人ではない。

「こんな夜遅くに…二人とも何処行ってたのかしら？」

優しく笑顔で微笑む桃子。でも開かれた目には光が宿っていなかった。

「ひっ…」

「あ、あうあうあう…」

びびって声も出せない二人。すると後ろから二人の大人が入ってきた。

「夜分遅くすみません。いやはや、貴方がこの子たちの保護者様で？」

「あ…は、はい。こちらこそ…」

彼は敬礼して言った。

「ワシは海鳴警察署長の大塚と…」

「敷島というものです。…ひとつお話をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

第三回　家族

「まあ…そうだったの？なのは、正太郎君。」

「「は、はい！」」

署長はうまく話をはぐらかして、なのはと正太郎は動物病院に預けたフェレットが心配になり外に出たが、謎の怪物に遭遇したということになった。嘘ではない。ただ、その怪物が何かが問題だった。

「以前からニュースでやっていたが…まさかこの街に…」

なのはと正太郎を探しまわっていた桃子以外の三人も、一緒に大塚署長と敷島博士の話を聞いていた。これは正太郎も知らなかったのだが、この一か月前から正体不明の怪物が銀行を襲ったり現金輸送車を襲撃する事件が相次いでいた。大都会の東京での犯行にもかかわらず、目撃者はごく少数。いたとしても酔っぱらいがほとんどで、ロボットだなんだと騒ぎ立てているだけだった。鉄人事件が終わりを告げた後、敷島重工は創業者の突然の行方不明とブラックオックスの責任を問われ、倒産。それをある財閥が買い取って、それは名前を変えて今も世界の最先端をリードする会社となった。鉄人事件が世界に与えた衝撃はすさまじく、人型巨大ロボットの建造はタブーとされ、混乱にまぎれ情報操作が行われた結果、現在において建造している企業は無い。そのかわり、電子頭脳を持った今までの「兵器」としてのロボットではなく、「家庭用」をコンセプトに置いたロボットへと開発が移っていった。だが、それも後にロボット最盛期と呼ばれた昭和三十年代前半のものと比べると、非常に稚拙なものであり、実用化には程遠かった。ひとえに、この年代にま

さに天才と呼ばれた博士たちが、戦争の名のもとにこぞって最強の兵器を目指した事にあるだろう。金田博士、不乱拳博士、ビッグファイア博士、ドラグネット博士、ゴロギル博士、そしてベネラード財団…だが、それらのもたらしたものは、破壊という名の惨禍だったのだ。

日本において、巨大ロボット技術を唯一持っていた敷島重工は、敷島博士によりその資料は全て燃やされてしまい、アメリカのバッカスもとっくの昔に、資料という資料は皆廃棄されてしまったのだ。だが、二十一世紀となった今、テログループが何らかの形で鉄人クラスとはいかずとも、その初期型クラスのロボットの建造資料を秘密裏に入手して行う、ロボット犯罪が増え始めた。これが大塚署長の言っていた怪物の正体だった。

「そう言うわけです。確かに分からんでないが…」

「ご、ごめんなさい…」

「その…フェレットさんが心配になっちゃって…」

落ち込むなのはと正太郎。士郎は二人の背中をバンバン叩くと、大きな声で笑った。

「はっはっはっ！！過ぎた事をいつまでもくよくよしても意味無いだろう？なのはも正太郎君も、しっかり反省したんだろ？」

二人はこくんと頷いた。

「なら、話は終わりだ。次からは気をつけろよ。よかったな、イタチ君。お前、この二人は命の恩人だぞ？しっかり感謝しとけ。」

深夜の家族会議が終わった高町家。すると正太郎は大塚署長と敷島博士と一緒に外へ出た。

「署長さん…博士…本当に本物なんですか？」

正太郎の言葉に署長は大笑いした。

「ははは！何をいっとるんだ、正太郎君。…正太郎君は、いつこの時代に来たのかね。」

真剣な顔になる署長。正太郎は言った。

「今日です。あの後、黒部ダムの土砂崩れに巻き込まれたと思ったら、意識を失って…」

すると敷島博士があごに手をやりながら言った。

「そうか…実はね、正太郎君。私たちがこの時代に来たのは十年前なんだ。どうやら君と私たちの時間は、ずれているらしい…」

だが、正太郎は素朴な違和感があった。

「そうなんですか…でも博士、署長さん。あれから十年も経っているなら…もう少し年を取ってなければおかしくないですか？」

正太郎の言う事は、正にその通りだった。いくらなんでも十年前と十年後で外見の変化しない人間がいるわけがない。むしろ正太郎には若返ったようにも見えた。

「実は…正太郎君。私たちが目覚めた時、姿が二十代のころに戻

っていたんだ。」

その言葉を聞いて正太郎は固まった。そう、この二人はなのはの父の士郎と同い年くらいか、下手したら若いという可能性もある。

「まあ、その話は長くなるから後にして…正太郎君はどうするんだい？今、高町さんの所で御厄介になっているようだけど、敷島重工の方に来るかい？」

正太郎はすこし考えると言った。

「ありがとうございます、博士。ですが…なのはちゃんは、まるで鉄人を初めて手にした時の僕みたいなんです。彼女は大きな力を突然手に入れてしまいました。過ぎた力は…戦いと破滅しか呼びません。なのはちゃんも、望まずとも戦いへの運命を避けて通れないでしょう。ですが、僕はあの子に…僕の様になってほしくないんです。だから…」

「…分かったよ、正太郎君。でも、私たちは何時でも君の味方だ。それだけは忘れないでくれたまえ。」

「はい…」

すると敷島博士は思い出したように言った。

「そういえば…『彼』は何処に隠したのかね？」

「海中です。あの海水浴場からずっと沖合の…」

正太郎が最初に直面した問題は、鉄人の隠し場所だった。こんな

ものがマスコミの目に触れたら大変な事になる。それと彼はあまり意識が無いが、鉄人２８号はかなりの知名度を誇り、６０代以上の高齢者で鉄人を知らない者はいないというほどだ。

「そうかい。ではしばらく経ったら、私の方で保管しよう。それにしても、『彼』が再び動き出すとは…それに…」

「はい。鉄人は自分の体を生き物の様に再生していました。ですが、もうその機能は働かないようです。鉄人を復活させたエネルギー結晶体は僕となのはちゃんの手で破壊しましたから。」

破壊…は正確にはしていないが、話がややこしくならないようにごまかした。正太郎とて魔法をまだ信じる事が出来ていないのだから。だが、正太郎は思った。

（なのはちゃんの使っていた魔法…あれは魔法なんてものではない。兵器だ。その気になれば米軍の駆逐艦とも互角に渡り合えるかもしれない。その力を向けているのが悪い怪物ならまだいい。だけど、もしもなのはちゃんが人や動物にその力を向けるのであれば…僕は、あの子を止めなければならない。絶対に。）

でも、正太郎はなのはのことを思い出すと、そんなことは杞憂だとほっと息を吐いた。

（なのはちゃんは優しい子だ。本当に純真な…天真爛漫という言葉が正に似合う子だよ。だけど…僕はそれが怖いんだ。純真すぎるからこそ…自分も、他人も傷付けてしまう事になる。僕みたいにはなって欲しくない。でも…あのままじゃ、僕の二の舞になる。）

「…郎君。正太郎君！！」

「ふぁっ！？す、すみません。ちょっとぼーとしちゃって…」

敷島博士は言った。

「なのはちゃんの事が心配なんだね。でも、君は体を休めなければならない。数日間、ろくに寝ていなかったからね。」

「は、はい…」

「肝心な時に体を壊してしまったら…それこそがなのはちゃんの身に危険を迫らせる事になってしまうよ。」

「…わかりました。すみません、博士。おやすみなさい…」

「ああ。おやすみ。」

正太郎は敷島と署長にあいさつすると、部屋へ戻っていった。

電気を消した真っ暗な部屋。布団の上で正太郎は、操縦機を掲げた。

「君は…また僕を救ってくれたんだね、鉄人。」

正太郎は操縦機を抱き締めると布団にもぐずりこんだ。

「なら今度は…僕が君を……」

「ん…朝だね。」

正太郎はいつも五時半ごろに目が覚める。現代人としてはかなり早起きな方だ。

「ふぁああ…結局今日も仮眠程度…ま、慣れているけどね。」

実質正太郎は二時間ちょいしか寝ていない。だが、少年探偵（現在休業中）にとってこの程度たしなみだ。さっそく着替えると、下に降りて行く正太郎。下のリビングでは、桃子がなのはのお弁当を作っていた。

「おはようございます、桃子さん。」

「ん？あれ、正太郎君！？おはよう。早いね～」

正太郎はテーブルを見ると言った。

「あれ？士郎さんも起きてらっしゃるんですか？」

すると桃子は驚いて言った。

「え？どうしてわかったの？」

正太郎は笑って言った。

「ははは、簡単ですよ。新聞が士郎さんの席にたたまれていたからです。でも、こんな朝早くからいったいどちらへ？」

桃子は正太郎の洞察力の鋭さに驚いた。彼女は知らないが、正太郎は数々の難事件や怪事件を解決してきた少年探偵である。頭脳明晰、運動神経抜群。さらには車の運転（しかも外車）と射撃の腕はプロ級である。

「うん。朝は近所をランニングしているのよ。」

「へ～、そうなんですか。健康的ですね。敷島博士にも見習ってほしいです。」

「うふふ…そうね。あと、恭也と美由希は道場で稽古をしているわ。」

正太郎はふと疑問に思った。

「道場…ですか？何か武道をやってらっしゃるのですか？」

「うん。この家はね、小太刀二刀御神流という流派をずっと継いでいる家なの。剣道…というより剣術ね。」

「御神流…失礼ですが、初耳です。」

桃子は笑った。

「あはは。まあか～なりマイナーだけどね…あ、でもこれは皆の前で言っちゃだめよ？特に恭也の前ではね。」

「わ、わかりました…善処します。」

すると玄関のドアが開く音が。ただいまの声とともに現れたのは、ジャージ姿の士郎だった。

「ただいま～っと、正太郎君じゃないか。おはよう。」

「おはようございます。」

礼儀正しい正太郎に、士郎は二度、三度感服した。

「いや～、健康的でいいなあ！うん。なのはにも見習ってもらいたいものだ…」

正太郎が話を聞くと、何でもなのははとても寝起きが悪く、目覚ましをかけた時間から起きるまで最低三十分はかかるそうな。だからなのはを時間になったら起こしてくれと士郎直々に頼まれたのだった。よその子供に頼む事なのか…？と思いながらも、正太郎は快く了承した。

「そう言うわけなんだが…頼めるかい？」

「え、ええ。がんばります。」

そんなこんなしているうちに、恭也と美由希が稽古から帰ってきた。正太郎はあいさつをすると、なのはを起こしに部屋へ向かった。

部屋の前に立つと、目覚ましの電子音が鳴り響いていた。昭和三十年代の人間にとって、このアラーム一つ一つでも聞きなれないも

のだったりする。

「これが今の時計なのか…なのはちゃーーーーん！朝だよーーーーーーー！！」

ノックをして声をかけるが、中ではくぐもった声しか聞こえない。しょうがなく正太郎はなのはの部屋に入った。

「なのはちゃん、入るよ…うっ！！」

流石の正太郎も、女の子の部屋に入るのは初めてだった。部屋の中は小さな可愛い小物で装飾されており、寝ているベッドも正太郎の家にあったものと比べてずっと可愛らしいデザインだった。その中でもぞもぞ動くなのは。ずるりと音を鳴らしている何かが床に落ちた。

「ん？これは…時計なのかな？」

正太郎はソレを手に取った。

「これは…あ、開いた！！」

手にした物体が開いた事に驚く正太郎。そこには約二分の一の面積の画面と、もう半分には多くのボタンが付いた機械…正太郎は全く見たことも触ったことも無いものだ。

「ど、どうやって操作すればいいんだろう、これ…」

よく見ると画面の左下にアラーム停止の文字が。画面のその文字を押しても反応しない。正太郎はその文字の真下にあったボタンを

押した。すると

「あ。や、やっと止まった…」

機械のアラームを止めるだけで全神経を使ってしまった正太郎。正太郎は、この機械は何の目的でつかわれるのか全く理解していない。おそらく『今の時計』と思っているに違いない。これが正太郎と携帯電話の出会いだった。だが、携帯電話を止める事が目的ではない。なのはを起こすことだ。

「なのはちゃん！早く起きないと遅刻しちゃうよ！！」

なのはの肩をゆする正太郎。フェレットもなのはの上で飛んだり跳ねたりしているが、なのはが寝がえりをうった事で下敷きにされてしまった。

「きゅう〜〜〜〜〜」

「ああ、イタチ君！！こら、なのはちゃん！イタチ君が潰れちゃうよ！！」

だがなのははまだ起きようとしない。

「むにゃ〜…後五分。」

だが、ついにここで正太郎の堪忍袋の緒が切れた。

「ふうん…まだ駄々をこねるんだね、なのはちゃんは。」

すると何を思ったのか、正太郎は拳銃をなのはに突きつけたのだ

！！

「少し…頭、冷やそっか。」

正太郎はなのはに向かって引き金を引いた！！

ガギューン！ガギューン！！

突然の銃声に跳び上がる高町家の面々。

「何、今の音！？」

士郎がまず答えた。

「銃声だ！！」

「しかも…二階から！？俺、行ってきます！！」

階段を駆け上る恭也。危険だと制止しても言う事を聞かない。

「待て、恭也！落ちつけ！！」

「離してくれ、父さん！！なのはっ！！大丈…夫…か？」

目が丸くなる恭也。そこにはベッドの上でひっくり返っているなのはと、ピストルを手に持った正太郎がいたのだった。

「すみません。かっとなってつい…」

なのはが速攻で着替えている間、正太郎はＯＨＡＮＡＳＨＩタイムまったな中だった。

「でも、いくら空砲でも銃を人に向けるのはよくないと思うわ。」

「母さん。それよりも正太郎君が何でピストルを持っているのか、そっちの方が問題なんじゃ…」

美由希のツッコみはことごとく無視された。なぜなら

「だってピストル持った正太郎君、かわいかったんだもん。いいじゃん。」

（（（（（い…いいのか！？それで…））））

それから正太郎の銃はカスタム銃だとかモデルは昭和二十年代後半に警察の使っていた物だとかいろんな話が出たが、そんなことはどうでもいい。するとなのはがパタパタと降りてきた。

「それじゃ、行ってきます！正太郎君、ごめんね！！」

「次はきちんと起きれるようにね。いってらっしゃい。」

学校へ行くなのは。正太郎はふと思い立った。

「士郎さん。なのはちゃんは、何処の尋常小学校に通っているんですか？」

昭和三十年代…つまり、正太郎の世代では、もう小学校の名称は現在と同じになっている。だが、小学校に通った事のない正太郎は戦時中、もしくは戦前のわずかな資料でしか小学校を詳しく知ることができなかった。

「ははは、尋常小学校か…今はね、普通に小学校と呼ぶんだ。あと、なのはの通っているところは私立聖祥大附属小学校と言うんだよ。」

それを聞いて正太郎は驚いた。

「えっ！？聖祥大學の付属校ですか！！でも初等科があるのか…でも、それってなのはちゃん、すっごく頭がいいんじゃないんですか！！」

正太郎も聖祥大學の名前は知っていた。東京七大学の慶応義塾、東京、法政、明治、立教、早稲田、そして聖祥。この中では聖祥が最も歴史の浅い学校ではあるが、キリスト教の教えを規範としており、要するに凄く頭のいいお坊ちゃま、お嬢様学校として定着していた。だが、戦後から貴族制度廃止に伴い自由化。宗教性は薄れたものの、今も日本を代表する七大学の一つとして尊敬されている。だが…残念なことに、野球が弱いのだ。物凄く。運動部がほぼ雑魚に近いという伝統（？）のある学校なのだ。

「まー、うちの家系で一番頭がいいのはなのはかもな。せがれと娘は頭じゃなく筋肉の方に栄養が行っているようだがな。なあ！！」

「うぐっ」

「あう…」

突然俯く恭也と美由希。あまりのタイミングの良さに正太郎は思わず笑ってしまった。

「ぷっ…ははは！！」

「ちょっと～笑ってないで何か言ってよ、正太郎君～」

正太郎が笑ったのは恭也たちの事ではなかった。

「ご、ごめんなさい。その…何だか楽しそうだったから…家族って、こうなんだなって。」

その話を聞いて、皆は真剣な顔になる。詳しくは聞いていないが、正太郎は生まれた時から両親のいない子供だった。正太郎は言った。

「…僕の父さんは、海軍の委託していた兵器開発の主任でした。南方の秘密基地で兵器の開発をしていたのですが、米軍の爆撃で…」

正太郎は少し言葉を詰まらせると言った。

「僕が生まれたのは、昭和二十年三月十日未明。…東京大空襲の最中でした。僕の母さんは、生まれたばかりの僕を抱いて、産後間もない体を引きずって僕と壕に逃げようとしましたが、母さんは空襲で…」

「…もういいよ。辛い話をさせてしまって…ごめんね。」

士郎に正太郎は寂しく笑った。

「…いいんですよ。僕は母さんの顔も名前も知らないのですから。」

「え…！？」

正太郎が物心ついた頃には、もうすでに写真も記録も一切残ってはいなかった。そして大塚署長も敷島博士も、母親の事については教えなかった。実際に写真も無いので、名前だけ聞いても意味は無かったが。

「そうだね…そうかもしれない。俺たちだって君の本当の家族になんてなれやしないさ。でも、でも、俺たちは…君と家族同様に接しているつもりだ。」

「士郎さん…」

すると恭也が

「ま、今すぐ…とはいかないが、こっちもお前に気を遣ったりしないし、お前も俺たちに気を遣わなくていい。まあ、仲よくしていこうぜ。」

「恭也さん…」

美由希も席から乗り出して言った。

「そうだよ！家族も増えたし、私も弟欲しかったから…よろしくね！」

「美由紀さん…ありがとうございます。」

その時にインターホンが鳴った。まだ慣れていなくてびくっとしてしまう正太郎を皆がくすくす笑う。

「わ、笑わないでくださいよぉ…」

「くくく…だ、だってさ、今時携帯電話知らない子っている！？」

美由希に正太郎は

「そ、そう言ったって僕はその、ずっと昔の人間だし、その…」

「もー、かわいいなー！！食べちゃうぞ、がおー！！」

正太郎を抱きしめて頭にかじりつく美由希。そんなこんなしていると、桃子が出てきた。

「正太郎君ってさ、学校…行った事無いって言ってたわよね？」

「は、はい…そうです…え…？！」

笑顔で箱を開ける美由希。そこにはなのはのきていた制服とよく似たデザインの服が入っていた。

「こ、これって…まさか…」

桃子は、笑顔で言った。

「正太郎君には、明日からなのはと同じ学校に通ってもらいまーす！！」

「え…えええええええ！？」

今までの全ての空気を破壊した桃子であった。

第四回　遺された記憶（前書き）

日常パートはここまでです。

第四回　遺された記憶

太平洋戦争。日本軍の真珠湾攻撃から開戦したその戦争は、世界中に大きな傷跡を残した。そして、ここ海鳴も例外ではなかった。１９４５年６月２４日。月村財閥の造船工場と飛行機工場のあった海鳴は、アメリカ軍の爆撃を受け、７０パーセント以上の建物が損壊、六千人の死者を出す惨劇となった。Ｂ－２９爆撃機４８７機・Ｐ－５１戦闘機８９機による焼夷弾攻撃と機銃掃射が行われた。全壊した建物の中には聖祥大學も含まれており、授業中で学童がいたのにもかかわらず、容赦なく爆弾が落とされ、海鳴川には逃げまどう学童の死体で埋め尽くされた。この中には、今で言うところの小学校低学年の児童も多かった。横浜大空襲の直後だったことから、厚木航空隊の零戦と雷電や、第十飛行師団（天翔）の屠龍・鐘馗などの戦闘機、高射第一師団（晴兵団）の八八式７．５ｃｍ野戦高射砲の活躍でＢ－２９を９機撃墜、１５７機に損害を与えた。だが、上昇性能の大きく劣る零戦は、Ｂ－２９が上昇してしまうと攻撃できず、一方的に撃墜されてしまう。そしてその装甲は、当時の爆撃機では非常に堅牢な造りで、命中してもなかなか撃墜まで追い込む事が出来なかった。そこで戦闘機で敵に体当たり攻撃を仕掛ける神風特攻隊が、戦艦だけではなく大型爆撃機にも特攻するよう命令が下った。撃墜された９機は、いずれも戦闘機の特攻で落とされたものだった。その多くは、聖祥大學の学生であった。

海鳴の海岸には、今も戦闘機の残骸が沈んでいると言われている。これは偶然なのだろうか。正太郎が鉄人を隠した場所は、数多くの戦闘機や戦艦の残骸が沈んでおり、墓場の様であった。あの千切れた機翼は零戦のものだろうか。胴体がズタズタになって沈んでいるのは…Ｐ－５１戦闘機だ。あの尾翼はＦ６Ｆのものだ。船体が真っ二つになって沈んでいるのは、日本軍の輸送船と駆逐艦だ。彼らは、今の日本をどのような目で海の底から見つめ続けているのだろうか。

我々は、彼らの犠牲に胸を張って答えられるのだろうか。鉄人は、静かにその海の底で次の出撃の時を待っていた。

第四回　遺された記憶

「んで、結局ショウタロウとかいうアイツは、なのはの家に居る事になったのね。あとフェレットも。」

「う、うん。正太郎君は家でお留守番。あとね、あのフェレットさん、ユーノ君って名前つけたの。」

「ユーノ…君？いい名前だね。でも、オスなのかなあ？」

なのははお弁当を食べながら、アリサとすずかと雑談していた。

「でもさ、あの子…どう見ても小学生だったよね！？学校行かなくていいのかしら。」

するとなのはは言った。

「あのね、アリサちゃん。…正太郎君は学校に行ってないんだって。物心つく前からお父さんもお母さんも亡くなっちゃって…」

「そうなんだ…私と同じだね。でも、孤児院に居た私を引き取って育ててくれたのはパパだし、私は血がつながっていなくてもパパを本当のパパの様に思ってるけど…そうでない子もいるんだね。」

「かわいそう…今まで、ずっとひとりぼっちだったのかな？」

すずかになのはは頷いた。

「…うん。正太郎君、同い年の子と遊んだり、お話した事って全然ないんだって。だからね、私、正太郎君のお友達になれたらいいなって。」

「そうよ！そうと決まったら早速今日いくわよ。」

「あ、私ノエルに連絡するね。」

すると昼休み終了のチャイムが鳴った。なのはたちは、屋上から急いで教室に向かった。

授業が始まった。今日は道徳の時間なので、みんな寝てたりしゃべってたりしている。すると担任の先生が手を叩いていった。

「はい！今日はみんなにビデオを見てもらいます。見終わった後に全員に感想を書いてもらいますから、ちゃんと見てね。」

「「「「え〜〜〜〜〜〜〜〜」」」」

早速寝ようと思っていたなのははブーイングした。この様な授業ほど面倒くさいものはない。しょうがないのでビデオを見ることにした。先生がデッキにテープを入れると、少し画面がざらついた後に始まった。

『実録・海鳴大空襲～昭和と戦争シリーズ第１９弾～』

「あーあ、またこれか…」

つまんなさそうに肘をついてペン回しをするアリサ。毎年この時期になると、決まってこの古いビデオを鑑賞する事になっている。

『昭和二十年六月二十四日。神奈川県海鳴市を中心とした、アメリカ軍の無差別爆撃が行われました。七十パーセント以上の建物が損壊、死者は六千人以上と言われています。アメリカ軍の爆撃機は、かの有名な七大学の一つである聖祥大學の校舎にも爆撃、校舎に居た多くの学童や先生が焼死しました。』

画面に映し出されたのは、あまりにもショッキングな光景だった。白黒の写真だったから細かいところまで見えないが、学校の近くを流れる海鳴川に、黒い何かがひしめき合っていた。

『これは、その校舎の近くの海鳴川に逃げ込み、死んでいった学童たちです。同じような光景が、東京大空襲の時に隅田川でも起こりました。火だるまになって命からがら逃げ出しても、そこに待っていたのは焼夷弾が落ちて熱湯と化した川でした。あるものは容赦ない機銃掃射で、またあるものは熱湯となった川に飛び込み、死んでいきました。』

「ひ…ひどい…」

見ているうちに、三人は目が釘づけになった。実際の写真がここまで出ているビデオは、今まで見た事が無かった。だが、なのははそれだけではなかった。正太郎の話を聞いていくにつれ、太平洋戦

争について興味を持ったのだ。正太郎が生まれたころ、日本はどうだったのだろうか。だが、なのはは図書館でガダルカナル島の写真集を見てしまったのだ。あまりにも凄惨な光景に、なのはは体の震えが止まらず、吐いてしまった。以降、白黒の写真を見るだけでなのはは気分が悪くなるようになってしまったのだった。

「でも、信じられないよね。私たちが生まれるずっと前にこんな事があったなんて…」

「うん…」

ビデオが終わると、なのはたちは感想のプリントを書いて提出した。さぼっていた何人かは居残りをさせられているが、なのはたちはホームルームが終わるとすぐに下校した。

「…なんかやな感じ。あーゆーの見せられたあとって…」

「テンション下がるよね…」

「にゃはははは…」

アリサもすずかも家にはすでに連絡を入れているため、三人は直接翠屋へと向かった。

「ただいまー！！」

「「おじゃましまーす！！」」

玄関から飛び出す三人の元気な女の子。出迎えたのは

「あ、なのはちゃん。おかえりなさい。あれ？その子たちは…」

キッチンの方から出てきたのは、雑巾を片手に持った正太郎だった。

「ただいま、正太郎君。あ、紹介するね。金髪の子は私の友達のアリサちゃんで、その隣の紫の髪の子はすずかちゃんって言うんだ。」

「アリサ・バニングスよ。運んでやったの私なんだから感謝しなさいよね！」

「月村すずかです。よろしくね。」

正太郎は二人に自己紹介をした。

「僕は金田正太郎といいます。よろしく、バニングスさん、月村さん。」

二人と握手する正太郎。するとアリサが言った。

「アリサでいいわ、正太郎。つっか、何でアンタがなのはの家に居るのよ。そもそも何でなのはだけ呼び捨て？」

「あはは…じ、実は…」

正太郎は二人に事情を説明した。

「…って言う事は…」

「正太郎君って、今から五十年前の人なの？！」

二人は、正太郎が五十年前の日本からタイムスリップしてしまった事を聞いて驚きを隠せなかった。

「ご、五十年前って言ったら…東京オリンピックとか？」

「東京オリンピックですか…？知りません…」

正太郎は東京オリンピックを知らない。後数年というところでタイムスリップしてしまったため、同時期に発売が開始されたカラーテレビも知らないのだ。正太郎のいた時代は、ちょうど池田勇人内閣総理大臣が、「もはや戦後ではない」を合言葉に所得倍増計画を打ち出した年である。つまり、高度経済成長時代に入るギリギリのところだったのだ。つまり三丁目の夕日よりも時代は前という事になる。

「でも、そんなことが実際あるものなのかしら。」

何だかんだ言ってソファーに座りながらジュースを飲んでいる一同。正太郎は天然水を飲んでいる。ジュースは甘すぎるらしい。

「僕も訳が分かりませんでした。土砂崩れに巻き込まれて気が付いたら五十年後の未来だったなんて…」

すると何やら音が鳴り響いた。正太郎が辺りを見渡すと、アリサが携帯電話を取りだした。

「あ、鮫島からメールだ。なになに…ったく、門限くらい守るわよ。心配性なんだから…」

パチパチとメールを打つアリサ。おかしなことに、正太郎は呆然としながらその光景を見ていた。

「ん…？どうしたの？正太郎君。」

なのはが聞くと正太郎は言った。

「い、いや、よくあんなに小さな文字を打てるなって…」

「あ、そっか。正太郎君は携帯電話知らないんだよね。」

ぽんと手を叩くすずか。そもそも三種の神器の世代の人間が知っているわけがない。

「でも、電話をしているんですよね？だったら電話交換手のかたはどうしているのでしょうか…？」

正太郎は不思議そうに言うが、三人はまるで正太郎の言葉の意味を理解できなかった。

「電話交換手…って、何？」

アリサが聞くと正太郎は

「え?電話をかけるときに繋いでくれるオペレーターの方ですよ…って、もしかして…」

どんどん暗くなっていく正太郎の顔。すずかは申し訳なさそうに言った。

「あのね、正太郎君。電話って、今は番号をかければすぐに繋がるんだよ。あとアリサちゃんのしていたのはメールって言って、文字を入力して相手の携帯電話に送ることなんだ。」

「文字…それって活字ですか?」

「う、うん。だったら見る?」

なのはが履歴を開いてメールを見せる。正太郎はびっくりした。

「す、すごい!!こんな技術があるんですか!!それに…この(^0^)ってなんですか!!?」

「あ、それって顔文字っていって、記号を組み合わせて作るんだ。いろいろあるんだよ。」

なのはは顔文字の履歴を開いた。

「ええっ!?そ、そんなにあるんですか!!」

「う、うん…」

携帯の画面を見ながら感嘆する正太郎。ポケベルでもこんな反応

をしたに違いない。

「それにしても、驚きの連続ですね。皆さんの感覚では分からないと思いますが、僕の感覚ではまるで空想科学小説のような物ばかりです。」

「そっかあ…あのさ、正太郎君。」

なのはは乗り出して言った。

「正太郎君って…私たちと同い年って言ってたよね。」

「うん。だから、もし僕が普通に年をとっていれば…六十歳になるね。」

「うわっ！爺さんじゃん。もとからアンタ爺臭いけど。」

アリサに言われてちょっと正太郎は落ち込んだ。

「こ、これでもみんなと同い年なんだよ…？」

「アリサ、正太郎君にそんなこと言ったらかわいそうだよ。」

「だって事実じゃん。あきらかに爺さんのような反応してたからね！メール見る時。」

それから四人でゲームをやることになって、やれ正太郎がカラーのテレビにまだ感嘆していたり、プレステのグラフィックにむちゃくちゃ感動していたり、ゲームなんて初めて触ったのに異常に強くてみんなｏｒｚしていたり…数え上げればきりがないので、ここで

省略しておく。

「正太郎君…なんでそんなに強いの…？」

「あは、あはははは…（鉄人の操縦のほうが難しかったな…）」

「認めない…私は認めないわっ！！」

アリサに勝手にライバル認定された正太郎は、なのはと一緒に二人を見送った。桃子に言われたから黙っているが、明日からなのはと同じ学校に行くのかとため息をついた。だが、正太郎は知らなかった。自分をタダで入学させようと、桃子と月村忍が学園長をミサイル（笑じゃない）で脅していたことを。問答無用でなのはと同じクラスに編入させたことを。そのクラスにはアリサとすずかもいることを。

そして、この二人に魔手が忍び寄っていることも、このときは誰も知る由もなかった…

第四回　遺された記憶（後書き）

次回、怪ロボットが登場します！！

第五回　けしごむ（前書き）

一か月以上間があいてしまいました…では。

第五回　けしごむ

物事の本質は、全て一つとは限らない。それは、数多くの事象からなるものである事が多いのだ。そう、これもその一つ。一つの出来事の中の、小さな出来事の一つでしかないのだ。それは…

第五回　けしごむ

その日、高町なのははごく普通に登校し、月村すずかとアリサ・バニングスとともに朝の会を待っていた。

「あ…けしごむ忘れちゃった…」

机に突っ伏すなのは。どうやら朝にカバンに入れようと思って、勉強机に置いたまま忘れてきてしまったようだ。読者のみなさんも、こんな経験ありますよね？作者はしょっちゅうします。

「もー…しょうがないわね。はい。」

アリサはカバンから消しゴムを出すと、なのはに渡した。包装のビニールが付いていて、新品である事が一目で分かった。

「ありがとう、アリサちゃん。これ、新品だよね？悪いからいいよ。」

「何言ってるのよ。人に貸すものだからこそ、新品じゃないといけないの。分かる？」

びしっと指さして言うアリサ。すずかはなのはに言った。

「アリサ、照れてるの？」

「ちょ、ちょっと、すずか！！そんなわけないでしょ！！」

顔を真っ赤にして怒りだすアリサ。なのはは苦笑するしかなかった。すると予鈴が鳴って先生が教室に入ってきた。

「あら？いつもに無く時間通りに来るじゃない。」

「アリサ、失礼だよぉ…」

すずかがそう言うも、アリサは完全に無視している。すると

「さて、今日、この学級に転校生がきました。」

うるさくなる教室。前の列の女子が、男か女かとか先生を質問攻めにしている。

「こーら、みんな静かに！！」

あまりにもうるさくなったので、先生が少し大きな声を出して静かにさせる。大方しゃべり声が聞こえなくなると、先生は言った。

「さて、それでは…いいわよ。」

「はい。」

男の子の声。ガラッとドアの開く音がする。このクラスでは珍しく、真っ黒な髪の男の子。その男の子の顔を見た時三人は

「えっ！？嘘！！」

「ええっ！？」

「な、なんで！！」

びっくりしてつい大声を出してしまう、アリサとすずかとなのはの三人。男の子は黒板に自分の名前を書いた。

「えっと、今日からこの学校に転校してきました、金田正太郎っていいます。まだここでの生活が慣れていませんが、どうかよろしくお願いします。」

頭を下げる正太郎。拍手。顔を上げると、なのは達と目があった。

「…へ？」

「にゃはははは…」

固まる正太郎。どうやら彼にも何かあるらしい。

「ええっ！？そ、そんな事、桃子さんから聞いていませんよ！？」

休み時間。正太郎は思わず声をあげてしまった。桃子から聞いた

話と食い違っており、正太郎はなのはとすずか、アリサと同じクラスになるなんて知らなかったのだ。

「…母さんの陰謀なの。」

「まー、アンタんとこのお母さんならやりかねないわね。」

「うう…お姉ちゃん、また変なことしてないかなぁ…わたし、妹として不安だよ……」

小さな妹に本気で心配される姉もどんなものかと正太郎は思った。今は落ちついているが、さっきまで正太郎は質問攻めに遭っていたのだ。さすがに正太郎も子供にここまで詰め寄られる経験は無いようで、結局アリサがその場をまとめて片がついた。漫画やゲーム、テレビ番組の話題に一向に付いていけなかったから、話題作りのために一通りやっておこうと思ったのはここだけの話。

しばらくするとチャイムが鳴って、先生が入ってくる。国語の授業だ。ちなみに正太郎は、アリサと席が隣になった。もともといた人はどうなったかについては、アリサの性格をよく頭に入れたうえでお察しください。

早速ノートを書き始める正太郎。アリサは正太郎を見ていった。

「ねえ、正太郎。」

「…え？どうかしたの、アリサ。」

「アンタ、鉛筆なんて使ってるの！？」

そう、正太郎の筆箱にはＨＢの黒鉛筆しか入っていなかったのだ。今時鉛筆しか使わないなんて…作者くらいだろうか？そもそも、最近の学校には鉛筆削り自体置いてない方が多い。このクラスで鉛筆を使っているのは、もちろん正太郎だけだ。

「そうは言うけど、シャープペンシル？でしたっけ。…鉛筆ってどれも尖っていると思うんだけど、それは別として。使いにくいよね？僕は鉛筆の方が手になじむと思うけど。」

「私はシャーペンかな。鉛筆は一回使ったけど、手が疲れるからやめたわ。」

そんな中、先生が授業態度の見回りを始めている事の気付いて、アリサは急いでしゃべるのをやめた。先生がこっちにやってくる。授業そっちのけでしゃべっていた事には気付いていないようだ。だが、先生は正太郎のノートを覗き込むと…固まった。

（！？あの馬鹿、黒板の内容全然写してなかったの！？ばれたら私まで怒られるじゃない！！）

そう思って、正太郎のノートを見るアリサ。すると

（な…何なの、コレ！！）

正太郎のノートには、こう記されていた。

一・平家物語ハ鎌倉時代ニ成立サレタト謂ハレテヰル。原作者ハ信濃前司行長ト謂ハレテヰルガ、定カデハナイ。
二・軍記物語デ在リ、仏教ノ思想ノ諸行無常カラ無常観ガ本題トナッテヰル。又、是ハ琵琶法師ニヨリ平曲トシテ語リツガレタモノデ

アル。尚…

ひらがなの部分はカタカナ、それも古い読みで書いてある。

「しょ…正太郎…君？」

国語の先生だって、そりゃあこんな文章を書けばビビるだろう。しかも角張った男文字なので、なんか不気味な雰囲気が出ていた。

「え゛……あ、あはは…」

とりあえず、その場は笑ってごまかした正太郎だった。

「という事があったのよ。」

今、四人は席を付けてお弁当を食べている。なのははたこさんウィンナーを、正太郎は自前のおにぎりをほおばっている。

「いや、昔の資料を読むときに慣れておこうと思ってたら、こっちの方に慣れちゃって…」

実は授業中に騒ぎが一回起こった。なんと授業中に、正太郎が突然ナイフを手に取ったのだ！！でもそれは、鉛筆を削るため。でも今の時代に、ナイフで鉛筆を削る小学生なんていやしない。若い女の先生だったので、先生もやり方を知らなかったようだ。

「…でも、正太郎もいいかげんにしたら？その爺臭いの。」

アリサが最後に残ったパセリを、むしゃむしゃと食べた。それを見てなのはは

「えっ！？アリサちゃん、パセリ食べるの！！」

「？あたりまえじゃない。なのはは食べないの？」

「ううん。」

結局後の三人はパセリを食べない（正太郎はパセリ自体知らない）と主張し、パセリを食べる派のアリサともめにもめた。最終的には「どーでもいい」ということで完結したが…この議論、まだまだ続くかもしれなかった。四人がごちそうさまをして弁当を片づけ始めたその時だった。

ギリギリギリ…

「？」

「何の音？」

突然、歯車のような音が鳴り響く。ギリギリ…ギリギリ…だんだん近くなってくる。そして！！

「ギュイィィィィイン！！」

なんと地面を突き破って、巨大ロボットが現れたのだ！！その装甲は黒く、ドラム缶の様なボディに細い蜘蛛の様な脚が四本、肩に

は一対のハサミのついた腕が。頭は三角錘に赤い目が二つ付いているものだった。

『我らはＰＸ団。アリサ・バニングスと月村すずかの身柄を要求する。断れば、校舎を破壊するぞ！！』

ＰＸ団…正太郎の脳裏に、数日前署長と博士と話したことが浮かんだ。非合理的な手段で、巨大ロボットを使ったテロ集団がある…と。あの二人は巨大な財閥のお嬢様。金目当てに身柄を要求しているのだろう。だが、相手は鉄人ほどの大きさのあるロボット。正太郎が戦って勝てる相手ではない。

「な、何よアイツ！！」

「これって、銀行を襲ったとかいうロボット！？」

教室内がパニックになる。逃げまどう小学生。先生もバラバラに行動する彼らを抑えることができない。

『いたぞ、あそこだ！！』

男の声が響く。すると、どうしたことだろうかっ！？ロボットが進路を変えて、正太郎たちの教室に向かっているではないか！！ロボットは大きく腕を振り上げると、教室に向かって突きだした！！

「うわっ！！」

「きゃー！！」

ロボットの腕が校舎の窓ごと壁を壊す。正太郎はアリサの手を握

った。

「なのはちゃん！奴の狙いは、アリサちゃんとすずかちゃんだ。君はすずかちゃんを連れて逃げるんだ！！二手に分かれて逃げるっ！！」

「えっ！？し、正太郎君！！」

なのはが呼びとめるよりも早く、正太郎はアリサを連れて廊下に出ると、左へ駆けていった。なのはもそれを見ると、正太郎とは反対方向の右へ走っていった。

（ちっ、二手に分かれたか…）

怪ロボットの操縦者は舌打ちした。だが、こんな事計算の内だ。

（でも、あの情報が正しければ、アリサ・バニングスの方が夜の一族よりは運動能力は劣る…よし、アリサを狙うぞ！！）

怪ロボットは、アリサを狙い始めた。確実に捕獲できる方を選んだのである。校舎から避難していく生徒たち。正太郎はアリサと手をつなぎながら、必死に逃げていた。

「正太郎！一体こいつは何なの！あのロボットは一体！！」

「そんなの僕にも分からないよ！でも、いまま逃げるしか無いだろ！！」

建物を突き破って、ロボットの腕が襲いかかる。間一髪で避ける正太郎とアリサ。

「向こうはモグラたたきでもしてるつもりなの！？」

冗談ではない。一歩間違えればそれこそおだぶつだ。正太郎は下の階に続く階段に降りようとしたが、運悪くロボットの腕が踊り場を破壊してしまった。

「くっ…アリサちゃん、上！！」

「わかったわ！！」

上の階を目指す二人。階段を上って、屋上に出ようとする。衝撃。なんと足元から数段下が無くなっているではないか！？壊れた外壁からのぞきこむロボット。だが

「ちょっと、開かないわよ！！」

「くそっ、開け、開けっ！！」

なんと屋上へ続くドアに、鍵が閉められていたのだ。いつもなら開いているはずなのに…こうしている間にも、ロボットの黒い影は迫る。

『見つけた…ヒヒ、捕まえたァ！！』

ロボットが二人に腕を伸ばす。アリサは恐怖のあまり足がすくみ、正太郎に震えてしがみついている。

「いや…来ないでぇ！！」

そんなアリサをあざ笑うかのように、ロボットの腕が迫る。後紙一重というその時だった。

「大丈夫だよ、アリサちゃん。」

「え…？」

正太郎は静かな、だけどはっきりした声で言った。

「ーーーーーー助けが来た。」

ギャィィィィン！！

金属と金属がぶつかり合う、凄まじい音。火花。吹っ飛ばされる怪ロボット。そこに立っていたのは、蒼く輝く、我らが鉄人２８号だった！！

「え…？」

アリサは呆然とした。なぜなら正太郎の手には、あの鉄の箱が握られていたからだ。巨大ロボット。それを操縦する正太郎。アリサの思考を停止させるには十分すぎる要素をもっていた。

「いくぞ、鉄人！！」

「ガオォォォォォォオオ！！」

くぐもった、まるで地の底から響くような咆哮を上げると、鉄人

のパンチが怪ロボットを捉えた。一撃で吹き飛ばされる怪ロボット。四本の足で起き上がるも、右のわき腹の装甲は、大きく陥没していた。

「大丈夫、アリサちゃん！！」

正太郎が話しかける。するとアリサは

「ちょ…ちょっと、あ、あれは何よ！？何でアンタがロ、ロボットなんて普通に操縦してるの！！っていうか、これ夢？！」

パニックになるアリサ。正太郎はなんとかして落ちつかそうとする。

「待って、アリサちゃん。落ちついて。詳しい話は後でするから、とりあえず今は状況を冷静に見よう。」

「あ、後で説明しなさいよね！って、正太郎！？」

その時、起き上がった怪ロボットが鉄人に襲いかかった！！学校のコンクリート外壁を一撃で破壊したパンチ。だが、鉄人はびくともしない。

『な、何！？』

「へへ、こんな攻撃じゃ、鉄人はびくともしないよ！！」

ロボットとロボットとの戦い。避難を終えた生徒たちの中で、誰かがこう叫んだ。

「がんばれ！悪いロボットをやっつけて！！」

それは、子供たちの声援だった。一人が叫ぶと、二人、三人と応援の輪が広がっていく。その場にいたすべての人が、鉄人に声援を送っていた。生徒も、先生も、駆け付けた警察や消防も。みんなが鉄人を応援していた。人々の声援が一つになり、鉄人に力を与える！！

『おのれ、これでも喰らえ！！』

怪ロボットの腹が開き、巨大な二門の機関砲が現れる。戦車の装甲をも易々と貫く弾丸だが、鉄人の装甲には傷一つ付かない！！

『ば、馬鹿な！？』

「馬鹿なのはそっちさ！パンチだ、鉄人！！」

「ガーーーーッ！！」

大きく振りかぶり、左ストレートが怪ロボットの命中する。両腕で防ぐ怪ロボット。だが、その衝撃で左の腕は途中で折れ、右腕は肩から抉られて鉄屑となる。そしてその勢いを利用し、今度は本命の右ストレートが、ロボットの胸を貫いた！！

『ちょ、直撃！？』

胸を貫かれた怪ロボットはしばらくその場で震えると、大爆発を起こした。同時に、学校の近くに停めてあった黒い怪しい車が逃げていく。恐らく操縦者を乗せていたのだろう。人々の歓声を仰ぎ、鉄人は夕焼けの海に向かって飛んでいった。

正太郎とアリサは、いっしょに学校の階段を下っていった。

「…アリサちゃん。この事は…」

「周りには黙っておけ…って、事でしょ？」

きょとんとする正太郎。その顔を見てアリサが笑う。

「私だってね、そんぐらいの事分かるわ。まあ、アンタもいろいろ訳ありなのは分かったわ。…ま、訳ありって言ったら、私たちみんなそうなんだけどね…」

「…ありがとう、アリサちゃん。」

笑いかける正太郎。それを見るとアリサは顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。

「か、勘違いしないでよねっ！！わ、私は別に正太郎がどうなったって知ったこっちゃないんだから…ほ、本当なんだからっ！！」

「あはは…ありがと。そうしとくよ。」

学校から出ると、なのはたちが手を振っている。

「あ、靴ひもほどけちゃった。正太郎、先に行ってて。」

「わかったよ、アリサちゃん。」

正太郎は靴ひもを結んでいるアリサより先に、駆け足でなのはのもとへ行った。

「正太郎君！アリサちゃん！よかった、無事で…」

「ありがとう、なのはちゃん。あのロボットが僕たちを助けてくれたんだ。」

そう言って笑う正太郎。すずかも正太郎に言った。

「ホントに良かった…私、とても怖くて…」

まだ震えているすずかの肩を、正太郎はしっかりと掴んで言った。

「もう、大丈夫だよ。すずかちゃん。みんな無事に帰ってこれたんだ。」

そう言って、正太郎がすずかに笑いかける。

「アリサちゃん！アリサちゃんも来……

そう言いかけて、正太郎は振り返った。

アリサが靴ひもを結び終わって立ち上がった。正太郎と目が合う。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ!!」

まだちょっと赤くなった顔で、そう言うアリサ。

突然の光景に、正太郎の意識と体がずれているのだ。

もとより正太郎が迅速に動いたり警告を発したりしても、間に合うタイミングではない。

アリサとの間の、わずか数十歩の距離。

走れば数秒の距離。だが、この距離は、今は月よりも、宇宙全体よりも遠かった。

アリサの頭部に――――――瓦礫の影が落ちた。

（アリサちゃん！？アリサちゃんアリサちゃんアリサちゃん――
うわぁぁぁぁ！？）

次の瞬間の惨劇を幻視した正太郎の意識は、あまりの恐怖に抱きすくめられ、ふっと遠のきかけ――

夕陽に照らされた校庭。なのはのポケットの中には、永遠にその持ち主に返されることのないけしごむが、わずかに陽の光を浴びて

いた。

第六回　願いの代価（前書き）

二か月も…本当にすみませんでした。なにも、なにも思いつかなかったんです。でも、何とか動き始めました。よかったです。

第六回　願いの代価

人は、何かを得るためにはそれ相応の【代価】を支払わなければならない。人は、人を犠牲にする事によって科学を得た。そう、人が生きるには、必ず誰かを犠牲にしなければならない。我々の足元は、知らないうちに血で染まっているのだ。そう、この場合は特に…

第六回　願いの代価

アリサ・バニングスが死んだ。目の前で起こった親友の死に耐えきれなくなったなのはは、一週間たっても部屋にこもったまま何も食べず、昨日ついに倒れて病院へと搬送された。謎のテロリストの襲撃と小学生の死は、たちまちニュースに取り上げられ、アリサの遺族にも多くの報道陣が押し寄せた。それはまるで、死肉に群がるウジ虫のようであったと正太郎は感じたのだった。

キリスト教の葬儀は仏教式の葬儀とは異なり、焼香をしたりはしない。なのはと違い、すずかはアリサの遺体を見ても死の実感が湧いていないのではないかと正太郎は感じた。

葬儀が終わり、正太郎は外に出る。空は青空。世界は、まるで何事も無かったかのように動いている。なら、なぜ人は生まれるのだろうか。なぜ人は死んでいくのだろうか。それなら、人が生まれ、そして死んでいく意味はないのではないか。正太郎は、漠然とだけどそう思った。

「正太郎君。では。」

「はい…」

正太郎は、あの後敷島博士のもとへ引き取られることとなった。人との関わりを、完全に断ち切ってしまったなのは。正太郎が自分から皆に打ち明けた。そして、今に至る。

「博士。どうやら僕は死神の様です。僕とかかわった人は、みんな死んでしまうんだ。」

「そんなことはない。あの事故だって、仕方がなかったんだ。君の責任じゃない。」

敷島博士に、正太郎は言った。

「あなたはいつもそうだ。仕方が無い…その【仕方が無い】で、一体何人もの人々を殺してきたんですか！！」

「正太郎君、落ちつきなさい。」

大塚署長になだめられる正太郎。正太郎は言った。

「僕は貴方を許さない。村雨さんだって同じだ。あなたがそうやって逃げたから、村雨さんの兄弟は死ななきゃならなかったんだ。不乱拳博士だって、ケリーさんだって、貴方の…そして、鉄人だって。」

「正太郎君、私は…」

「いいですよ。そっとしておいてください。」

正太郎はそう言うと、踵を返した。

正太郎は、今後の事をユーノと話していた。

「だから、僕はその方がいいと思うんだ。」

それは、ジュエルシードについての事だった。なのはがこんな状態なので、その任務を正太郎が全面的に引き継ぐというものだった。だが、正太郎にはリンカーコアが無く、ジュエルシードの封印ができない。ユーノは言った。

「だけど…僕はなのはの気持ちを尊重したいんだ。あの子は…」

「そんな事を言っている場合じゃないだろ!!ジュエルシードがもし街中で日中に覚醒したら、大惨事を起こしかねない!!」

「確かにそうだよ!!だけど…」

ユーノに正太郎は言う。

「戦いは遊びじゃないんだよ、ユーノ!!君は、自分の戦いになのはちゃんを巻き込んで…もしなのはちゃんが死んじゃったら、その責任はどう取るつもりだったんだ!!死んだ人間はもう戻ってこないんだよ、アリサちゃんのように!!」

それを聞いて、ユーノは黙ってしまう。正太郎は、ユーノを両手で包んでいった。

「強く言いすぎてごめん。でも、もう僕はなのはちゃんが壊れていくところを見たくないんだ。」

その言葉に、ユーノは弱弱しく頷いた。

「分かった…そうだ、僕は甘かった。」

「そうじゃないさ。僕は見すぎたんだよ、人間の死を。」

「でも、それでは君が…」

そう言うユーノに、正太郎は自分には鉄人があると言って説得した。今回の事件で、ついに国が警察と自衛隊を招集、アメリカ軍まで介入してテログループに徹底抗戦すると会見を開いた。なので、アリサを殺した連中は正太郎は戦わなくていい事になっていた。確かに個人的な感情はある。だが、正太郎は自分にしかできない最優先事項であるジュエルシードの捜索に、全力を注ぐ事にしたのだった。

「ありがとう…そして、すまない。」

「何、それはお互い様だよ、ユーノ。」

そう言うと、二人は別れていった。

「ごめんください。」

「…あら、正太郎君。ありがとう、なのはのお見舞いに来てくれたの？」

翌日、病院に行くと桃子が正太郎を出迎えた。その顔は、あの日よりやつれていた。

「はい。…桃子さん、僕は…」

「自分を責めないで、正太郎君。…さ、中へ。」

桃子に案内され、正太郎は病室に入った。

「…なのはちゃん。」

正太郎の呼び掛けに、なのはは答えなかった。ずっと窓の外をぼんやりと見ていた。

「なのは、ご飯だよ。」

そう言って、桃子はなのはを横にすると、ペースト状の栄養飲料を口の中に流し込む。食べようとしないので、こうやって流し込むしかないのだ。

「あ…ああー…」

咀嚼をしないため、口からこぼれたものは拭いて取り除く。なのはは栄養剤の点滴を受けているが、これは桃子が自ら希望して行っていた。

「…意味、ないよね。」

桃子は正太郎に言った。

「ねぇ、正太郎君。正太郎君は…なのはの事、死んじゃってると思う？」

ふいに、桃子の眼から涙があふれる。嗚咽を上げながら、正太郎を抱きしめて泣く桃子。

「やだよぉ…こんなのやだよぉ……！！」

正太郎は、震える桃子を抱きしめることしかできなかった。

「うあ…ああ、あ……」

無表情のなのはは、口からよだれを垂らして呻いた。そんななのはを、正太郎はただ見下ろすことしかできなかった。

「いくぞ、鉄人！！」

「ガオォォォォォォォ！！」

午後。正太郎はユーノの結界の中で、鉄人でジュエルシードの暴走体と戦っていた。犬を吸収した暴走体は、最初に戦ったものよりも遥かに強かった。だが

「掴め、鉄人！！」

鉄人が暴走体を握りしめる。叫び声をあげながら、もがく暴走体。鉄人は握りつぶすと地面に叩きつけ、両腕で何度も何度も殴り続ける。神社の横の崖は大きく陥没し、暴走体の肉片が、ピクピクと痙攣していた。

「ユーノ君、封印を！！」

「わかった！ジュエルシード・シリアル？…封印！！」

レイジングハートをかざすユーノ。徹底的に痛めつけられたジュエルシードは、ユーノの魔力でも封印する事が出来た。地面にできたクレーターを見ると、その中央では子犬が死んでいた。魔力ダメージではなく、物理ダメージで倒したからであった。

正太郎は子犬を埋めると、墓を作った。ユーノは正太郎に言った。

「…ありがとう、助かったよ。」

「ねえ、ユーノ…」

正太郎は、墓を見つめながらユーノに言った。

「幸せって…誰かの幸せを犠牲にしないと掴めないものなのかな…？」

「正太郎……」

ユーノは転送魔法で鉄人を送ると、正太郎と共に結界を出た。そ

の問いに、ユーノは答えられなかった。

「ジュエルシードは二つ目…か。」

夜。正太郎は庭に出て、冷たい麦茶を飲む。

「ジュエルシードも、戦争の遺物なのだろうか…」

ユーノにも聞いてみたが、帰ってきた答えは「よくわからない」だった。ジュエルシードのような失われた文明によって作り出されたオーバーテクノロジー…この世界で言うところの「オーパーツ」なるものの総称として「ロストロギア」と呼称し、故にその作られた目的はそれぞれ違うため、完全に解析できない間は一体何なのか分からないらしい。一応ジュエルシードはエネルギーの結晶体らしいが、それは兵器としてなのか、あるいは何かの動力として作られたのか…

どちらにしても、こういったものの関わる事件は、ろくな事にはならない。結局最後にはいくつもの罪と後悔、そして死者への慟哭だけだということを、正太郎は知っている。彼も加害者であり、また被害者なのだから。

「なのはちゃんの心が戻らなかったら…そうさ、なのはちゃんを殺したのは僕だ。僕はどうやら死神らしい。僕と関わった人は、みんな死んでいくんだ。」

正太郎は、じっと敷島邸を見つめる。

「だったら…僕一人で十分だ。」

正太郎は生活に必要なものを詰めたトランクを持って、いずこかへと去っていく。何処へ？目的地などない。そう、人と離れる事が、正太郎の選んだ最善の道だったのだから。

「君はそれで気が済んだかね？正太郎君。」

正太郎はゆっくりと振り返る。後ろを向くと、大塚署長が腕を組んで立っていった。

「君一人で、何をしようというのかね。」

「ほっといてください！署長さんには…関係ありませんよ…」

正太郎に署長は言った。

「正太郎君。逃げているのは君の方じゃ。アリサちゃんが亡くなった事も、なのはちゃんが心に大きな傷を負ったのも…そういった事実から君は逃げているんじゃ。」

「逃げる…？何を言っているんですか、署長さん。僕は、もう誰ともかかわらない！！僕と関わった人は、みんな死んじゃうんだ！！」

正太郎に署長は反論する。

「なら、それが彼女たちが望んでいる事なのかね？」

「え…？」

署長は、帽子を深くかぶって言う。

「バニングスさんから聞いたよ。」

す…と、署長は封筒を差し出す。

「これを読みなさい、正太郎君。」

両手で受け取る正太郎。そこには、ボールペンでこう書かれていた。

『十年後の正太郎へ』　アリサ・バニングス

正太郎の手が震える。その手を、署長は両手で包みこむ。この時、正太郎は署長の手は何と大きくて、暖かいのだろうと思った。

「…読んであげてくれ、正太郎君。これが、アリサちゃんの気持ちだったんだ。」

正太郎は、この間の…最後のホームルームを思い出した。二分の一成人式の予行の様な形で、みながそれぞれ色々な人に手紙を書き、先生が十年後に送ってくれるというシステムだった。だが、アリサが亡くなった今、その手紙は署長経由で正太郎のもとに届いたのだった。

「アリサちゃん…僕は……」

そっと封筒を開けると、鉛筆で書かれた便箋を広げた。

――――十年後の正太郎へ

お元気ですか。とか言っても、別にアンタの様な天然には関

係ないわね。
　あたしの夢を特別に聞かせてあげるわ。とかいっても、十年前だけどね。あたし、メイドになりたいの。おかしいでしょ？あたしがお手伝いになるなんて、あべこべにもほどがあるわ。第一、あたしは人に使われるのが一っっ番嫌いなのはあんたも分かってるでしょ！
　でもね、あたし…しょ、正太郎にだったら…つ、使われてあげたっていいんだから！！あたしに家事全部やらせて、ぶくぶくに太って、とっとと死んじゃいなさい！！
　それまでに他の女とイチャイチャしてたらぶっ殺すからね！！　アリサ

「ふ…ふふ…そっか。」

正太郎は、目を閉じて笑うと、便箋を封筒に丁寧に戻す。そして、夜空を見上げて言った。

「…署長さん。」

「…何かね？正太郎君。」

正太郎の目から涙がこぼれる。それでも彼は、空を見上げて言った。

「人は…何故、大切なものを失って初めて気がつくのでしょうか。」

署長は…すこし黙ってから言った。

「それは…最も手に入れないものだからじゃ。」

署長を見る正太郎。すると、泣きながら笑って言った。

「そうですか…だとしたら、人間はなんて愚かな生き物なのでしょうか。」

正太郎が言葉に出せたのはここまでだった。地面にうずくまり、拳を地面に叩きつけて泣き叫ぶ正太郎。

「愚か…か。人間は愚かだったんだよ。誕生したその時から、ずっと…」

自分のコートを正太郎に被せ、正太郎をおぶって帰る署長。

（正太郎君…偽善者はわしじゃ。美辞麗句を並べたとこで…いや、言い訳はしない。）

「すまない…すまない、正太郎君。」

署長のこの時の呟きは、正太郎に耳には入っていなかった。

第七回　怪ロボット現る（前書き）

今日付けで１７歳になった作者です。一年たつのって早いなあ…と思いつつ。

第七回　怪ロボット現る

そう、あれは…いいえ、言い訳はしないわ。私は…私は…神の、神の領域に触れてしまったのよ。そう、すべては…すべては「2」ではじまり、「2」で終わる…そのことを、なぜ人間たちは理解しようとしないの！？だが…だが私は…神のみぞ知る「3」の領域に触れてしまった。だから、私は…償わなければならない。だが、それは神に対してではない。それは…

第七回　怪ロボットあらわる

あれから二週間がたった。正太郎とユーノは、ジュエルシードを現在４つ手に入れていた。３つ目はサッカーチームの少年が持っていたのを偶然見つけ、正太郎が趣味で秘かに集めている、綺麗な鉱物の蛍石と交換して入手、もうひとつは大塚署長が偶然道で拾ったものだった。だが、これからぴたっと見つからなくなってしまったのだ。正太郎は朝ごはんを食べながらユーノに話しかけた。

「順調がよかったけど、急に見つからなくなったね。ひょっとしたら他の第三者が回収してるって可能性はない？」

ふと疑問に思った事を口にした正太郎。

「え？どうしてそう思うんだい？」

「あれだけのエネルギーを持った物質なんだ。使い方を知ってる人間なら、回収して悪用する人もいるはずだ。君のいる世界からこ

こに来る事は簡単なのかい？」

ユーノから返ってきた答えはイエスだった。自分は事故でたまたま来てしまったが、明確な目的地があれば、飛行機に乗る感覚でこれてしまうらしい。それに、ジュエルシードが地球に来る原因となった不可解な事故…あれも仕組まれていたんじゃないかと正太郎は考えた。

「だとしたら…この世界に、君となのはちゃん以外に魔法を使える人がいる可能性は極めて高いね。」

正太郎の説明は説得力があった。明確な根拠のある正論だったからだ。ユーノは正太郎に謝った。

「すまない…僕のせいで、君は…」

「…違うさ。僕はどう転がろうと戦いに身を置く運命らしい。とっくに諦めはついているさ。それに…僕が戦ってきた相手は、そのほとんどが組織だった。それに比べたら…」

ユーノは正太郎に礼を言った。それから雑談をした二人だったが、ジュエルシードに関しては何の進展もなかった。

翌日の早朝、まだ暗いうちに正太郎は、ユーノに起こされた。ジュエルシードのかすかな反応があったというのだ。パジャマを脱いでいつもの服に着替えると、万が一のために操縦機も持って家を出た。

あれだけの事があったので、学校はしばらく休校になっている。

正太郎とユーノは、反応のあった山へと向かった。山道…といっても、ここは海鳴温泉近辺のハイキングコースになっており、子供の足でも十分登ることができる。歩きながらユーノは言った。

「正太郎。徐々にだけど、反応が上がってきている。」

「うん。きっとこの近くだ。二手に分かれて探索しよう。」

正太郎の提案で、二人は別々にジュエルシードを探す事にした。ユーノは林道を、正太郎は川の中を。１０分近く探しても、なかなか見つからなかった。

「ユーノ！いったん休憩にしない？」

「そうだね。今からそっちに行く。」

正太郎とユーノは、川辺の大きな岩の上に乗って休憩していた。苔むした表面は、この岩がどれだけ長い間ここにあったのかを物語っていた。平日の午前中なので、人もほとんど通らない。と、その時だった。

「！？」

正太郎に迫る違和感。そう、これは

「まさか…結界！？正太郎、隠れて！！」

ユーノの警告に、急いで身を隠す正太郎。彼はユーノに聞いた。

「結界…だって！？」

「うん。この展開されるときの感触…間違いないよ。なのはちゃん以外の何者かが結界を張ったんだ。」

ついに、恐れていた事が起こってしまった。いや、正確には起こっていたのかもしれない。と、その時だった。

「うわっ！？」

何か巨大なものが、凄まじい速さで正太郎たちの目の前の崖に激突する。抉れた崖から出てきたもの…それは、巨大なザリガニだった。尻尾を伸ばせば、鉄人より大きいかもしれない。それがボールのように吹き飛んだのだ。そして

「何…これ？！」

最初に気付いたのはユーノだった。視界が徐々に暗くなっていくのだ。

「黒い…霧…！！？」

正太郎は姿勢をかがめる。混乱するユーノ。だが、正太郎は戦慄していた。

（黒い霧…？でも、まさか…そんなはずは…）

と、その時だった。

ガチャン…ガチャン…

巨大な重機が走るような不気味な音が、黒い霧の向こうで聞こえる。この金属音は一定の間隔とスピードで響き続ける。だが、その音はゆっくりと、だが確実に大きくなっている。そう、まるで巨大な何かが近付いているように…

ズウン…ズウゥゥゥゥゥゥン！！

二人の足元が揺れる。正太郎がよろけた…その時だった。

「ブゥゥゥゥン……ギュィィィィィィィィン！！！」

凄まじいまでの咆哮は、周囲を覆う霧を吹き飛ばす。その衝撃は、その近くにいた正太郎とユーノも吹き飛ばした。

「うわああっ！？」

「ユーノ！！」

正太郎はユーノをとっさに抱きかかえると、川に転がり落ちる。びしょ濡れになって立ち上がる正太郎。だが、ソレを見たとき、正太郎は言葉を失った。

「あ…あれは……！！？」

ソレは、全長が２０メートルほど…鉄人よりも若干大きい人型だった。無駄な装飾の一切ない、全身漆黒の巨人。人間の顔にあたる部分には、半月状の目に見立てたサーチライトが光る。黒く雄々しい二本の角に、頭頂部の電子頭脳を守る、真紅の特殊強化ガラス。そう、その名も！！

「ブラック…オックス……！！？」

「ギュィィィィィィン！！！」

ブラックオックスが、ジュエルシードによって巨大化したと思われる巨大ザリガニに向かっていく。ザリガニがハサミで攻撃するが、オックスは片腕で楽々とつかむと、関節をもぎ取る。圧倒的な強さでザリガニを叩きのめすオックス。足を全てもぎ取り、ピチピチと尻尾を動かすことしかできないそれを掴むと、殻を凄まじい力ではぎ取る。そして直接体内からジュエルシードを引きずりだすと、巨大ザリガニは元の大きさに戻った。

「あれは…ジュエルシード！？正太郎、鉄人を！！」

「わかった！！ユーノ、お願い！！」

正太郎は、ブラックオックスと再三戦った事がある。確かにオックスの妨害電波は強力だ。だが、鉄人にはすでにプロテクターが付いている。ユーノが鉄人を転送しようとした時だった。魔法陣がかすれてしまうのだ。焦るユーノ。

「な、何で！？そんな、魔力は残っているはずなのに…！！」

正太郎は気がついた。

「ユーノ！！ひょっとしたら、ブラックオックスは魔法も妨害してしまうのかもしれない。」

「そんなっ！！じゃあ…！！」

さっきまで念話を使っていなかったので、気づくのに遅れてしまったのだ。立ちこめるこの黒い霧がある限り、ユーノは魔法を使えない。このままではジュエルシードを持ち去られてしまう！？何か打つ手は無いか、考える正太郎。と、その時ユーノが声を上げた。

「そうか…正太郎！！僕の体を支えて、川の中に沈めて！！」

「川の中…はっ！？」

正太郎はユーノの真意に気がついた。

「うん。流れる水の中では、妨害電波を受けない。それって細かい粒子なんだろ？」

「ありがとう、ユーノ！！」

ユーノは息を止めて、正太郎に沈めてもらう。水底で魔法陣を描くユーノ。案の定、今度はかすれることなく魔法が発動した。

「いいよ、正太郎！！」

「来い！！鉄人！！！」

正太郎の呼びかけと共に、川から鉄人が転送されてくる。水しぶきと共に、ユーノも正太郎の肩に乗る。操縦者は遠くにいるらしく、背後に鉄人が立っている事にオックスは気付いていないようだ。

「パンチだ、鉄人！！」

背後から、鉄人が先制攻撃を仕掛ける！！機体がジュエルシード

によって再生されても、妨害電波のプロテクターは効いているようだ。正面から崖に突っ込むオックスに、連続でパンチをする鉄人。振り向きざまに入った一発が、オックスの右目のパーツを破壊した。が、クロスカウンターの形でオックスのパンチも鉄人に命中する。鼻の先端が少し折れ曲がるが、とっさにバックステップしたので、機体自体のダメージはほとんどなかった。

「反応速度が遅い…？突っ込め、鉄人！！」

ジェットエンジンが火を噴き、鉄人は前傾姿勢でオックスに突撃する。が、オックスは両手を鉄人に向けると、指先から稲妻のような雷光を発射した！！しかし、鉄人は怯まず突撃する。が

「ど、どうした、鉄人！？」

なんと、オックスの目の前で鉄人が機能停止してしまったのだ！？鉄人を殴り飛ばし、転倒させるオックス。一方の鉄人は、まるで糸の切れた操り人形のようにぴくりともしない。オックスは再び両手を向けると、今度は指先が開いて何かの発射口の様なものが現れた。

「ギュイィィィィィン！！」

なんと、オックスの指先から熱線が放たれたのだ！！それは鉄人の装甲を赤熱させ、融解させる。たまたま顔を覆っていた左腕は、融けて崩れ落ちる。その先にある左側の顔はドロドロに溶け、左目が完全に装甲に埋没している。あたかもケロイド状の火傷のような姿になる鉄人。

「ああっ！？このままじゃ、鉄人が！！」

正太郎がいくら頑張っても、鉄人は動かない。このままでは鉄人が破壊されてしまう。と、その時。正太郎は閃いた。

「…あっ！？」

「ど、どうしたの、正太郎！」

正太郎は言った。

「ユーノ！チェーンバインドでオックスの…あのロボットの指先を覆える！？」

ユーノは答えた。

「あ…ああ！やってみるっ！！」

ユーノは再び水の中に入り、チェーンバインドを使った。緑色の魔力の鎖は、オックスの左手の五本指に絡みつき、まるで指サックのような形になる。すると、バインドにあたったオックスの熱線が、今度はオックス自身の指を融かしはじめたのだ！！爆発する左手の指。オックスが怯む。と、その時だった。鉄人のコントロールが一瞬戻ったのだ！！鉄人は、まだ赤く輝いている自分の左腕を拾い上げると、渾身の力でブラックオックスの腹部めがけて投げ飛ばした！！

「投げろ！鉄人！！」

「ガオォォォォォォ！！」

ブラックオックスの腹…胸と腰を連結する蛇腹状の装甲に、鉄人の左腕が突き刺さる！！爆発！！転倒するオックス。しかし、オックスは転倒ざまに、残った右手から熱線を発射する。が、鉄人はとっさに飛んでかわす。そして、飛ぶ際に掴んだ岩をオックスに向かって投げつける！！が、オックスはパンチで粉々に岩を砕いてしまう。しかしその隙をついて、鉄人は空中で急降下して、オックスと激突する！！と、その時だった。正太郎は、オックスから異音を感じた。

「うっ！？」

正太郎はユーノに、自分の下に隠れるように言ってしゃがむ。

「催涙ガスだ…くうっ！？」

ブラックオックスは、正太郎とユーノにばれないように催涙ガスをばらまいていたのだ！！さらにブラックオックスは黒い霧を発生させると、目の前が真っ暗になった。遠ざかっていくオックスの足音。霧が晴れて正太郎とユーノに視力が戻る頃には、その場には鉄人しか立っていなかった。

「逃がしたか…いや、逃げてくれた…のか？」

正太郎は鉄人を見上げた。左腕を失い、左側の顔が潰れてしまった鉄人。全身の装甲も、さまざまなところがへこんでいたり融けていたりしている。ブラックオックスにあんな武器が搭載されているなんて、予想外だった。だが、それよりも重要な事は、ブラックオックスを誰が操縦していたかである。

「ユーノ、大丈夫だった？」

正太郎が声をかけると、ユーノは沈んだ声で言った。

「僕は大丈夫だよ、正太郎。でも…ジュエルシード、とられちゃった…」

しかし、それを聞いて正太郎は笑顔で言った。

「ははは…これ何だ？」

ユーノの前に握りこぶしを差し出す鉄人。すると、ユーノの目の前に青い光の線が走る。それは

「ジュエルシード！？ど、どうして！！」

「最後に鉄人がオックスに体当たりしただろう？その時に、奪い取ったんだ。」

巨大な鉄人で、あんなに小さなジュエルシードを…ユーノは舌を巻いた。ユーノが思っている以上に、正太郎は鉄人の操縦が神がかっていた。普通だったらあんな操縦できっこない。

だが、正太郎の心は沈んでいた。ひとつは鉄人がボロボロになってしまった事。もうひとつは、驚くほどに強化されたブラックオックスの武装。武器だけでなく、装甲の硬さも段違いで上がっていたのだ。また一つ、課題が増えてしまった。

その頃　？？？

「まさか…アレが、アレが！？何故、何故この時代に！？何故存在しているの！！」

モニターの前で、紫色の髪を伸ばした女性が頭をかきむしる。

「まさか、完成させていたのだというのか…カネダァァァァァァァァ！！！！」

女の叫びは、無人のホールのどこまでも響き渡っていた。

第七回　怪ロボット現る（後書き）

ブラックオックスが登場しました。武装のイメージは、原作版とゲーム版と皇帝の紋章版を足した感じにするつもりです。それにしても、こんなに早い段階でなのはが離脱するＳＳも少ないのでは…？と思ったりします。なのはとアリサ、出番少なくってゴメンネ。

第八回　フランケン・ファイルズ（前書き）

試験が終わりました。いろんな意味で終わりました。そう、いろｒｙ）

と、いうことで執筆を再開した緒方です。ある程度前に書いていたので、すぐに投稿できましたね。

それにしても、最近の映画も俳優も、こう心にズキンとくるものがないなぁ…と感じる今日この頃。試験終わったので、早速『野獣死すべし』を見てしまいましたよ。やっぱり松田優作はすげぇや。私もこう、クレイジーなハートを持ってみたいものです…法律の範囲で。

第八回　フランケン・ファイルズ

自然の本質が水ならば、人類の本質は火であった。火…これこそが、自然と人類を隔てた、最も大きな障壁であった。だが、火は物質が無ければ燃えることはできない。犠牲となるものが無ければ、火は消えてしまう。そして火は、自分自身を燃やしている事にも気付けなかった…いや、気付こうとしなかったのだ…

第八回　フランケン・ファイルズ

ブラックオックス出現から三日がたった。敷島重工では、前回の戦いで中破した鉄人の修理がおこなわれていた。こんな事もあろうかと、敷島博士は鉄人の腕や足のパーツの予備を、すでに作っていたのだ。それを指揮する博士と、横で膨大な量のメモをとる月村忍。正太郎は、すずかと話をしていた。

「そうなんだ…やはり。」

「うん…」

昨日、すずかと正太郎はなのはのお見舞いに行った。なのはの精神はまだ回復していなかったが、なんとか食べさせてもらってだけどご飯を食べられるようにまでなっていた。少しずつだけどその進歩に、正太郎とすずかは心から喜んだ。酷いやつれようだった桃子も、少しだけど顔色が良くなったような気がする。なのはのためにも、正太郎はジュエルシード集めに一層の力を入れる事にした。

だが、気合は入ったものの、全然モノが見つからない。ブラック

オックスを操縦していた何者かが、自分たちの気付くよりも先に集めているのかもしれない。オックスが魔法を妨害する電波を出していたことから、相手は確実に魔法の存在を知っている。だとすると、相手は地球以外のどこか別の世界の人間である可能性が極めて高い。だが、正太郎は違和感を覚えた。

現代の科学力をもってすれば、オックスの量産など容易くできる。巨大ロボットとはいえ、それこそ半世紀前の代物なのだ。電子頭脳といったＯＳ類なら、現代の方が遥かに進んでいる。単にジュエルシードを集めるだけならば、それこそ集団で回収した方がはるかに効率がいいはずだ。だが、自分と相対したオックスは一体きり。ユーノの転送魔法で鉄人を送れるのだから、その気になればいくらでも手持ちのオックスを転送できたはずだ。なのにそれをしなかった。という事は、相手はオックスを一体しか持っていない事になる。何故一体だけなのか…正太郎は考えていた。

（もしかして…相手は単独なのか？でも、資金はどうやって…）

「正太郎君？どうしたの、大丈夫？」

心配して声をかけてきたすずかに、正太郎は現実に引き戻される。

「凄い汗だよ…調子悪いの？」

「え…？あ、ああ、大丈夫だよ、すずかちゃん。ちょっと考え事してただけさ。心配させてごめんね。」

「ううん。別に何ともなければいいんだけど…」

すずかは修理されている鉄人を見ていった。

「私ね…まだ、アリサちゃんが死んじゃったって実感が無いんだ…私って、ひどい人なのかな…？」

そう言うすずかに正太郎は言った。

「それはいけない事じゃないよ…誰だってそうだよ。親しければ親しいほど、人の死を受け入れるには時間がかかるものさ。すずかちゃんの感覚は正しいんだよ。だから、自分を責めないで。」

そう言ってすずかを励ます正太郎。だが、彼は思った。自分にこんな言葉を言える資格はないと。自分には、自分自身にアリサの死を責める資格もないと。そして感情に任せて敷島博士や大塚署長にあたったが、その行動の幼稚さに正太郎は自分自身に酷い嫌悪感を覚えた。偽善者は自分の方だと。自分はただ鉄人の操縦機を握っていればいい。それが自分の生き方だから。いや、そう考えることで自分を悲劇の主人公にしているのかもしれない。正太郎は自分自身に虫唾が走った。

正太郎はすずかに別れを告げると、敷島博士のもとへ向かった。

「博士、すみません。鉄人をこんなにしてしまって…」

「ん…？ああ、正太郎君じゃないか。いや、これは君が悪いわけではない。まさか、あんなすごい武器がオックスについていたなんて…想定外だったよ。」

正太郎は聞いてみた。

「博士。あのオックスの電磁波なんですが…」

「うん、そうだね。正太郎君。オックスが指先から出した電磁波

…あれは、操縦機の電波を妨害するのではなく、過電圧で電子頭脳そのものを焼き切ってしまうものらしい。」

「そんな！？じゃあ、鉄人は！！」

だが、敷島博士は自信たっぷりに言った。

「ははは、安心したまえ、正太郎君。先生はやはり大天才だった。鉄人が行動不能に陥ったのはあの時だけで、精密検査の後で動かしたら、ちゃんと動くようになったよ。」

そう言われて操縦機を手渡される正太郎。試しに起動させてみると、鉄人は元通り、その勇ましい咆哮を上げた。

「やった…！！ありがとうございます、博士。」

「いやいや、それなら月村さんにお礼を言ってくれたまえ。私に貴重なアドバイスをくれたのは、彼女だ。彼女の力が無ければ、半世紀先の科学についていく事が出来なかった。」

すると、忍がこっちに走ってきた。

「成功ですね、博士。あ、君が…正太郎君？」

「あ、はい！はじめまして。金田正太郎です。」

「直接話をするのははじめてよね。私は月村忍。敷島博士にいろいろ教わっているの。正太郎君の評判は、博士やすずかから聞いているわ。」

忍は、正太郎の手を握って言った。

「…アリサちゃんの話は聞いたわ。なのはちゃんの件もそうだけど、自分を責めちゃダメ。自分を責めることよりも、今何をするべきか、最善のことを常に考えるようにしなさい。あなたのするべきこと…正太郎君には腰を据えて、事に臨んでもらいたいわ。そうすれば、自然と結果はついてくるものだわ。」

「…ありがとうございます、月村さん。僕のやるべきこと…そうですね、そうだと思います。何だか、胸につっかえていたものがとれたような気がします。」

「それはよかったわ。あ、あと私は忍でいいわ。」

「あ、はい。では、今度から忍さんと呼ばせてもらいます。」

正太郎は挨拶をすると、忍に別れを告げて出ていった。工場の外に出ると、太陽の光がまぶしく、正太郎は目を細くする。そして両腕を伸ばして大きな伸びをすると、署長に連れられて家に帰っていった。

それは、その日の真夜中の出来事だった。

「正太郎君、正太郎君。大変じゃ！！」

突然の声に、正太郎は目をこすりながら起き上がる。振り向くと、慌てた様子で大塚署長が走ってくる。正太郎の前にたどり着くと、

へなへな～と倒れてしまった。

「も～、署長さん。一体何時だと思ってるんですか。」

署長は帽子をくいっと上げていった。

「それが大事件なんじゃ。海鳴市のすぐ近くの遠見市刑務所の地下で爆発が起こったんじゃ！！戦時中の不発弾が原因らしい！！」

「な、なんですって！？」

正太郎は大塚署長と敷島博士と一緒にパトカーに乗ると、現場に急行した。

「ひどい…」

正太郎の見たものは、左側の建物が崩壊した刑務所だった。幸いにも死傷者は出なかったらしいが、それにしても不審な点は多かった。

「しっかし、どうして不発弾がこの地下に…」

署長の言うことは正しかった。調べてみると、この刑務所は昭和十八年から建てられており、空襲を上手く免れて、戦後まで生き残り続けた建造物だった。それから施設の老朽化が原因で昭和三十九年に第一回の改築、昭和五十三年に第二回の改築が行われ、現在第三回目の改築が行われようとした矢先に起こった事件だった。そう、この話を聞く限りでは、不発弾が地下に存在するなどあり得ないの

だ。一度空襲で建物が壊れた後に、その上から新しく建てたとなれば合点はいく。だが、元から被害を受けていないのに、不発弾があるわけないのだ。

「大塚署長！！これを見てください！！」

鑑識に呼ばれ、大塚署長は現場に向かう。正太郎と博士は待機だ。署長はブルーシートの中に入っていった。

「こ、これを見てください！！」

「何々…ややっ！？こ、これは！！？」

署長の見たもの。それは、爆心地から地下に続く階段だった。そしてその入り口には、緑色の液体が付着していたのだ。

「作業班を回します。危険ですので、中に入らないでください。」

「あ、ああ…頼まれての入らんわい。おお、コワイコワイ。」

署長が退散しようとしたその時だった。

「バ…バカヤロウ！！」

「ひいっ！？ま、全く驚かせるなっての…」

後ろで突然怒鳴り声がしたので、びくっとなってしまった署長。後ろを向くと、上司が部下に対して顔を真っ赤にして怒っていた。階級は署長の方が高いので、彼は仲裁に入る事にした。

「まあまあ、そんなに大声を出さんでもええじゃないですか。」

「あ…はっ！！大塚署長殿！！これは失礼いたしました。実は昨日の騒ぎで、喧嘩で捕まっていた男が一人、逃げ出してしまったようなんです。」

「なんじゃと？それは本当か！！」

詳しい話を聞いてみると、男は何も持っておらず、話す事も雲を掴む様な取りとめもない事だったという。身元の分かる物が何もなかったので名前を書かせたが、この名前も偽名だったらしい。明日、詳しく取り調べをする予定だったのだ。

「まるで人を小馬鹿にしたような奴じゃな。むむむ…許さんぞ！！」

かんかんに怒る署長。正太郎が知らせを受けなだめるのには、随分と時間がかかってしまった。

一週間後

遠見市の商店街の外れに、小さなアパートがある。トイレつきの六畳間に、小さなちゃぶ台を囲んで、黒髪の男と金髪の少女、そして赤髪の女が座っている。家具云々は無いらしく、三人でカップラーメンをすすっていた。

「しっかし、あんたらも難儀だな。でも感謝してるぜ。俺はあんたらがいたからムショから出れたようなもんだ。」

そう言われると、金髪の少女はかなり恥ずかしがり屋のようで、肩をすぼめてカップラーメンのつゆを見つめてしまう。代わりに赤髪の女が答えた。

「そんなこと言ったって、あたしたちだって何が何だかわけがわからないんだ。そんな感謝されるようなことなんか、何一つしてないよ。ね、フェイト。」

「…う、うん。アルフの言う通りだよ…」

特徴的な癖っ毛の男は、そんな二人のやり取りを見て、思わず吹いてしまう。

「ぷはははは！」

「ちょっと、何がそんなに面白いんだい？」

男はごめんごめんと謝ってから言った。

「いやあ…ちょっと昔のことを思い出してな。しっかし、便所で小便してたらいきなりドーン！！だもんなあ…ありゃ死ぬかと思ったぜ。そしたらあんたらがぶっ倒れてるってわけだ。」

そう、この男は爆発の後に脱獄した犯罪者だったのだ。逃げる途中、男は全裸で倒れているフェイトとアルフを見つけた。とりあえず体を自分の服で覆い、その場から逃走した。その後に持っていた現金で二人の服を買ったのだが、若い男が女性用下着の売り場をうろつくというものは、精神衛生上あまり良くないと言えるだろう。言うまでもなく彼にそんな性癖は無いが、明らかに嫌な雰囲気だったので、そそくさ買って逃げるように店の外に出たのだった。

彼には裏の繋がりがあり、やはり蛇の道は蛇というものか、アパートを借りるだけの頭金は用意することができた。しかし困ったことに、この二人をどうするかという問題に直面した。過去の記憶のない二人を放っておけるわけでもなく、とりあえずしばらくの間、同居することにしたのだった。

「その…ごめんなさい、あの、私…」

「ああ…昔のことが思い出せねえんだろ？」

男にフェイトは頷いて答えた。

「なあに、別に変に聞いたりなんかしねえよ。ま、とりあえず落ち着くこったあ…な！アルフよぉ！！」

そう言って笑う男。彼の名は、村雨健次といった。

「結局脱獄犯は見つかりませんでしたね。」

そんなことを知らない正太郎は、ため息をついた。逃げた男もちょっと繁華街で喧嘩になっただけのチンピラだったので、そんなに積極的に捜査が行なわれることもなかった。近々無罪で釈放されるはずだったと、警察は弁解したが、どう考えても言い訳である。だが、相手は凶悪犯でも何か悪いことをしたわけでもないので話題にもならなかったのだった。それよりも、重要なことがあった。それは

「そうじゃな…じゃが…」

「問題は…これですね。」

正太郎は証拠品の写真を見た。あの後、地下に鑑識が入って押収した証拠品が写っている。その多くはノートやファイルだった。

「日本軍の秘密基地だったのかもしれん…」

署長に博士は言った。

「そうですね。その可能性は大きいかもしれません。この周辺は戦時中、軍港でしたから…」

二人に正太郎は言った。

「でも…こんな文字、見た事ありませんよ。」

この資料の最大の謎。それはすべてに記されていた文字だった。だが、この文字は世界中のどの言語にも一致しなかったのだ。解析の結果、この地下施設は昭和十年代から二十年代、ちょうど戦時中のものだということは分かっていた。だが、この謎の文字…日本軍の暗号という説も出ているが、今までそのような記録は見つかっていない。アルファベットをひっくり返したような文字や、ギリシャ文字に形の似ているものなど、よくわからない言語がばらばらになっている。結局答えを出せないまま、正太郎は写真を家に持ち帰った。部屋のベッドに突っ伏すと、ユーノに声をかけた。

「ただいま、ユーノ。しばらくこうさせて。」

「お帰り、正太郎。…見ればわかるけど、死んでるね。」

「……うん。ここんとこ寝てないからさ。」

突っ伏しながら会話をする正太郎。すると、手から紙がひらひらと落ちる。あの写真だ。ユーノは正太郎に写真について尋ねた。

「ねえ、正太郎。この写真は何？」

そう言うユーノに、正太郎は答えた。

「ああ、それね…何か爆発現場の地下室から見つかったんだって。何だか見た事のない文字で書かれているから、何が何だかさっぱりだよ…」

そう言って頭をかきむしる正太郎に反し、ユーノは興味深そうに写真を見つめている。

「…ん？どうしたの、ユーノ。」

横目でそう言う正太郎。だが、次の瞬間正太郎は自分の耳を疑った。

「正太郎…これ、僕の世界の言葉だよ！？」

「な、なんだって！！？」

正太郎はベッドから跳び上がってユーノに迫る。

「教えて、ユーノ！！何て、何て書いてあった！！」

その剣幕に少し押されるユーノ。ちょっと落ち着いてと正太郎に

言うと、

「あ…ご、ごめん。つい…」

と、大人しくなった。

「詳しくは分からないけど、右の緑色のノートには…あ、ごめん。かすれてて読めないや。左の灰色のファイルには…何だろう？人名かな？『フランケン…ファイルズ』…？多分読みはあってると思うよ。旧字体だからちょっと読みにくいけど、仕事の都合上こっちの方が慣れてるっし…って、正太郎！？」

正太郎は体の震えが止まらなかった。

「そう、アレは…あの時も同じだった。まさか…いや、そんなはずはない。だけど…こんな、こんなはずは……」

『ブラックオックス』に、『フランケン・ファイルズ』…これは偶然なのだろうか。正太郎の心と同じように、事件もまた渦を巻き始めていた。

第九回　もうひとりの魔法少女

太平洋戦争末期。当初の予想を大いに覆す持久戦において、日本は国力・兵力・生産力の全てにおいてアメリカら連合国に劣り、敗北へと向かっていった。

一発逆転を狙ったワンマン・アーミー精神をよしとする軍は、切り札と言えるほどの新造兵器の開発をすすめていた。しかし秋水や富嶽、そして烈風といったように、その多くは日の目を見ることなく潰え、歴史の闇へと葬り去られていった。だが…

第九回　もうひとりの魔法少女

正太郎は、敷島博士にある書類を見せていた。それは、ユーノが翻訳した【フランケン・ファイルズ】に記されていた文章だった。それは、正太郎と博士の二人が想像していた物と同じであった。

「やはり…第二計画と…」

「ああ、全く同じだ。写本の様だね…だが、問題はこれではない。この写本を基に、何者かがあの計画を利用しようとしている。これで一体何をしようとしているのか、それが最大の問題だ…」

正太郎の予想通り、【フランケン・ファイルズ】は、【鉄人第二計画】の写本であった。だが、それはただのコピーにすぎなかったのだ。その後も調査がつづけられたが、事件の真相にたどり着けるような証拠品は、何一つ見つからなかった。

「もう片方の緑のノートはただの白紙…結局、振り出しに戻ってしまいましたね。」

「そうだね、正太郎君。でも、私たちは警察ではない。事件の真相を追究するよりも、今は目の前にあるものを一つずつこなしていくしかないようだ…」

そう言うと、博士は完全に修理の終わった鉄人の足を触った。この金属の感触…これが戦闘機であれば。これが戦車であれば。これが戦艦であれば。これが空母であれば…そんな思いが博士の胸に込み上げてくる。彼にとっては、ほんの十年ちょっと前の話なのだ。おまけに体が若くなったことで、余計に当時の事を思い出す。

「あ、博士。そろそろ時間なんで失礼します。」

「…あ、ああ。すまないね、つき合わせてしまって。ジュエルシードの捜索かい？」

「まあ、そんなところです。そろそろ学校が再開してしまうんで、時間のあるうちにできるだけ行動を起こしたいと思いまして。」

事件からしばらく経ち、学校もようやく再開のめどが立った。だが、それは正太郎にとってはあまり良くないニュースだった。学校が始まってしまえば、日中のほとんどの時間が潰れてしまい、ジュエルシードの捜索をするのは深夜になってしまう。流石にそんな生活を続けてしまったら、体を壊してしまうに違いない。それも正太郎は昭和三十年代の人間なのだ。いくら少年探偵とはいえ、いつもは９時、遅くても１１時には就寝しているような人間には、夜中の１時や２時はきついのだ。

正太郎は今日も、ユーノと一緒にジュエルシードの捜索に向かった。実はすずかに家に招待をされていて、行く事になっていたのだ。

ちょうどすずかの家の付近はまだ探していなかったし、正太郎自身もすずかの事が心配だったからだ。

「すずかちゃん！正太郎です。」

インターホンを押すと、すぐにすずかが出てきた。

「正太郎君、いらっしゃい。待って、今開けるから。」

外見もさることながら、すずかの屋敷は中の装飾も凄かった。ゴシック調のヨーロッパ建築を模倣した、明治時代に建てられたこの屋敷には、代々伝わる月村家の歴史が刻まれていた。

「はぁ～…いつ見ても凄いね、すずかちゃんの家は。」

この時代に来てからはアパート暮らしの正太郎には、驚きが隠せなかった。

「そ、そうかな？ねえ、正太郎君。私クッキー焼いたんだけど、食べる？」

「え、いいの！それでは御馳走になろうかな。」

正太郎とすずかは、クッキーを食べながら談笑していた。すずかがアップルティーなのに対し、正太郎は相変わらずブラックのコーヒーに口を付けていた。眠気が取れるらしい。

「ねえ、正太郎君。」

「何？すずかちゃん。」

ふいに話しかけてきたすずかに正太郎は聞き返した。

「そのね…正太郎君って、鉄人を持っているんだよね。」

「…うん。そうだよ。」

「だから…戦いに巻き込まれたりするんだよね。」

それに正太郎は

「…そうだよ。いろんな敵と戦った。命の危険にさらされる事なんて、何度もあった。でも、これが僕のけじめのつけ方なんだ。」

「けじめ…？」

正太郎はすずかに言った。

「鉄人を作ったのは、紛れもない僕の父さんだ。でも、鉄人が復活したせいで、一つの家族の運命を狂わせて…殺してしまったんだ。彼らはギャングだった。ならず者さ。でも…でも、人の命は違うんだ。ならず者だろうと総理大臣だろうと、死んでしまっては終わりなんだ。だから僕は、最期まで鉄人の操縦機を握ることを決めた。それが、あの人たちに報いることのできる唯一の方法だから。」

「正太郎君…」

話を聞いたすずかは、背中を向けて言った。

「あのね、正太郎君。私…普通の人間じゃないんだ。」

その後の正太郎の言葉に、すずかは耳を疑った。

「…気付いていたよ。初めて会った時から。」

「！！？」

正太郎は言った。

「もしかして…そんなことで僕が君を嫌うとでも思った？なのはちゃんも、生きていればアリサちゃんも、そんな事は絶対にいわないと思うよ。」

「で、でも、私…！！」

すれ違いざまに、正太郎はすずかに言った。

「…バケモノは、僕の方さ。」

「え…？」

正太郎は急用が入ったと告げ、すずかのもとを去っていった。

「…ユーノ君。ジュエルシードが？」

「うん。すずかちゃんの家のすぐ近くなんだ。猶予はない。鉄人の出動も考えて！！」

「わ、わかった！！」

ユーノを肩に乗せ、庭の森に走る正太郎。

「もし、ブラックオックスが現れたら…どうする？正太郎。」

正太郎はユーノに言った。

「いや…その可能性は低いよ。」

「え？な、何でそんな事が言えるんだい？」

疑問の声を上げるユーノに、正太郎は説明した。

「ブラックオックス…確かに強力だけど、あのロボットに飛行能力は無い。だから長距離移動ができないんだ。」

「で、でも、僕たちがはじめに出会ったのは…あっ！！」

はっとするユーノ。

「そうだよ、ユーノ君。ブラックオックスは市街地までは侵入できないのさ。どう頑張ってもね。結界を張るとはいえ、市街地の中であれだけのロボットを動かすことは難しい。そのうえ操縦者が何処にいるのか分かってしまうリスクが高い。つまり、ブラックオックスに関しては山岳地帯といった住宅地から離れた場所でしか遭遇しない…というのが僕の予想なんだけど、どうかな？」

正太郎の分析に、ユーノはまたまた舌を巻いた。少年探偵の名は伊達じゃない。だが、正太郎は表情を曇らせていった。

「そう…ブラックオックスならば…ね。」

草木を分け入って早３０分。その異様な光景に正太郎とユーノは目が点になっていた。

「…クレイジーだ。味噌汁で顔を洗ってくるよ。」

ぼーっと見つめる正太郎。その視線の先には、巨大化した猫の姿があった。

「で、でも、あのサイズを捕獲するのはとても…ここは鉄人で慎重に！！」

「う、うん、そうだね！来い！鉄人！！」

転送魔法で地中から現れる鉄人。パワーを最低まで落として、正太郎は鉄人を猫と相対させた。

「よし、鉄人。慎重にその猫を捕まえるんだ！！」

「ガオー！！」

猫に組み合う鉄人。最低パワーとはいえ、鉄人の力は計り知れない。猫が少し痛そうにしているので、正太郎は腕で挟むように変更した。

「よし、固定できた。ユーノ君！今の内に封印を！！」

だが、その時だった。鉄人に向かって飛んでくるマシンガン！！地面は粉々に吹っ飛び、土煙が舞い上がる。

「うわっ！！だ、誰だ！！」

正太郎が空を見上げると、黒い影が正太郎を覆い尽くした。直後に襲う轟音！！それは、吹き飛ばされた鉄人が倒れる音だった。そして空からは、銀白色に光る怪ロボットがゆっくりと地面に降り立った。

「あ、あれは！？」

「ギュオォォォォォォォォォン！！！」

咆哮する銀色のロボット。正太郎は見覚えがあった。だが、そんなことよりも正太郎はロボットの肩の上に立つ黒衣の少女の方に目が行った。金色のツインテールに、黒いレオタードとマントを重ね合わせたようなコスチューム。そして自身の身長ほどもある巨大な鎌。正太郎は直感で分かった。彼女は、魔法少女だと。

「バッカス！！レーザー光線を使え！！」

少女の指示と同時に、バッカスと呼ばれた怪ロボットの目が光る。そこから放たれた青白い閃光が、鉄人の装甲にぶつかりスパークを起こす。飛び散る火花。だが、鉄人は健在だ。

「何…？」

「何故、アメリカ軍のロボットが…でも、そんなことはどうでも

いい！！鉄人！あの怪ロボットをやっつけろ！！」

短く咆哮し、大きく振りかぶってバッカスにパンチする鉄人。それに対しバッカスも鉄人にパンチを繰り出す。二つの鉄拳が、空中で激突した。耳をつんざくような轟音と、体が吹き飛ぶのではないかと思うほどの衝撃波が周囲に広がる。

「あのロボット…バッカスと互角？！飛べ！バッカス！！」

少女の命令で空に飛び上がるバッカス。それを追って、鉄人もジェットエンジンから火を噴いて空を飛ぶ。空中でもつれ合う二大ロボット。

（くっ…パワー、装甲、運動性…どれをとっても向こうが圧倒的に有利だ。）

正太郎はさっき拳を撃ち合わせた時、鉄人が若干力負けしている事に気がついていた。それだけではない。バッカスには鉄人以上の飛翔能力が追加されただけでなく、強力な武装もやはり追加されていたのだ。そして最大の違いは処理能力。いくら金田博士が天才だとはいえ、半世紀以上先の未来のＯＳに対抗できるわけがない。

だが、鉄人は負けなかった。若干の反応の遅さ。鉄人の動きのクセを、正太郎は体で覚えていた。そしてロボットの性能は勝るものの、操縦者はまるで素人だったのが幸いした。バッカスのパンチを空中で食らい、墜落する鉄人。追撃しようとバッカスが加速して襲いかかった時、突然鉄人は真横に拳を突き出すと、ジェットエンジンを最大出力で片方だけ起動させ、瞬時にその場で旋回した。加速のついた鉄人の人間で言うところの【裏拳】が、バッカスの頭部に真横から激突する！！拳の直撃を受けた左目が割れて吹っ飛ぶバッカス。一瞬姿勢の崩れたバッカスの隙をついて、着陸して体勢を立

て直した鉄人は、拳を大きく振り上げる。

「パンチだ！鉄人！！」

「ガオォォォォォォォォ！！！」

ジェットを噴きあげながら、落下するバッカスに肉薄する！！ど、鉄人の渾身の鉄拳がバッカスの鳩尾に食い込み、装甲をわずかながらへこませる。体をくの字にしながら吹き飛ばされるバッカス。ジェットエンジンを逆噴射して停止しようとするが追いつかず、地面を抉りながらあおむけに倒れた。

「ど、どうだ！！」

だが

「ああっ！！正太郎、ジュエルシードが？！」

そう、正太郎が鉄人でバッカスと戦っていたすきに、赤毛に動物の耳の様なものが生えた女がジュエルシードを封印してしまったのだ！！

「しまった、二人組だったのか？！」

正太郎はすぐに鉄人を起動させて、赤毛の女を捕まえようとする。だが、今度は操縦者の正太郎を金色に光る稲妻が襲った。

「ぐうっ！？」

正太郎の目の前には、巨大な鎌を持ったバッカスの操縦者と思わ

れる少女が、自身の武器を振り上げていた。首を完全に狙っていたそれを正太郎はしゃがんで避ける。そして腹を抱え込む様な形でその場に転がった。

「ロストロギア・ジュエルシード…悪いけど、頂いていきます。」

正太郎に止めを刺そうと少女が魔力弾を発射しようとした、その時だった。

「そこだあっ！！」

一発の銃声。放たれた弾丸は、彼女の得物のバルディッシュの柄を貫き、砕いた。そう、正太郎は隠し持っていた拳銃を服の下から転がりざまに撃ったのだ。普通の人間が出来るような代物ではない。正太郎は上着を脱いで腕に巻きつけると、少女に向かって走り込んだ。

「やりたくないけど…ツァァァァァッ！！」

少女の鳩尾に、正太郎の肘が入る！！だが、次の瞬間正太郎の体は宙を舞っていた。背中に衝撃を感じた。血を吐く正太郎。

（あ…あばらが、何本か持ってかれた…）

そこには、拳を突き出した少女が立っていた。

（嘘だ…この力、人間じゃない？！）

正太郎は死の恐怖を感じた。明らかに少女の力は人間のそれではなかった。額を脂汗が垂れる。おまけに少女に殴られた時に操縦機

を落としてしまったのだ。

「くそ…ッ！！」

地面に落ちた操縦機。草むらの中で、それを見つめる影があった。ユーノだった。

（まずい…あの女の子は、何らかの方法で肉体改造を受けているはずだ。このままでは正太郎が！！）

そう、敵はユーノの事が眼中に入っていなかったのだ。というのも、正太郎がいきなり鉄人を出したからである。チャンスといえばチャンスだが、正太郎が敵わなかった少女に、もともと攻撃魔法を持っていないユーノが挑むなど、結果は歴然だ。

ユーノは考えた末、一つの事を思いついた。だが、それは危険な賭けでもあった。

（まずい…まずいまずいまずい！！ええい、もうこうなったら、どうにでもなれってんだ！！）

ユーノの体を緑色の光が覆うと、そこから金髪の少年が現れた。少年は草むらから駆けだすと、鉄人の操縦機を手に取った。

「何っ？！」

「僕だって正太郎くらいには…来い！鉄人！！」

金髪の少年の正体は、ユーノだった。そう、ユーノは正太郎の動きを見ながら鉄人の操縦方法を覚えていたのだ。流石に正太郎ほどの腕前ではないが、基本的な動作だけなら見ていただけで学習して

いたのだ。ユーノに命令されて戻ってくる鉄人。

「よし、パンチだ！鉄人、あの子を足止めするんだ！！さ、正太郎君。つかまって！！」

周囲をやたらめったらに攻撃する鉄人。その隙にユーノは転送魔法を発動させた。

「き、君は…」

「話は後で！転送！！」

追ってきたバッカスを投げ飛ばして、魔法陣の中に入る鉄人。次の瞬間、ふたりと鉄人は光と共にその場から消えた。

「逃げられた…ジュエルシードは手に入ったけど…」

黒衣の少女・フェイトは、バッカスを見て呟いた。

「格闘しか使えないロボットに、バッカスがここまでやられるだなんて…」

圧倒的な性能差だったにもかかわらず、ロボットに損傷を負ったのはフェイトの方だった。それに、彼女の方では修理や補給が効かない。破壊された右目と抉れた胸部装甲が、それを物語っていた。

「だけど、負けるわけにはいかない。もう私には…時間が無いのだから。」

第九回　もうひとりの魔法少女（後書き）

フェイトの機体はバッカスになりました。原作設定や原作版ジャイアントロボのＧＲ３をモデルにしています。しかし、そうなるとブラックオックスは…？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9237p/

鉄人28号　海鳴に立つ無敵の兵士

2011年7月13日15時06分発行